明治二十[illegible]年四月二十四日發行

女鑑

第百七號

東京國光社

女鑑第百七號　目錄

女鑑

新版圖に對する婦人の覺悟……一

論說

良婦論……坂本三七郎……五

史談

阿女……驪井ふく子……八

荒木田麗女傳……井上頼文……一一

家政

いけ花(十六)……田邊わけ子……二三

たちぬひ……西山たい子……二五

たいところ……二六

このころ……鋤柄義子……二八

學園

日本文典(八)……鹽井正男……二九

拜禮のかんかへ……故人小中村清矩……三三

漫錄

なみた草(承前)……京極忠高女……三五

あさせの(承前)……故人藤井高尙……三九

しろへ

おきの玉藻(九)……永石德文……四二

淸少納言……石榑千亦……四五

月夜に釜をぬく……たけを……四八

男女の合性……龜井白菊子……四九

櫻のたくひ……住山幾子……五〇

花見……草の舍主人……五二

淺草公園……驪井ふく子……五四

野寺の墓(つゝき)……石摶青苔……五八

落花(四)……柴田千稻……六〇

むら雲(一)……白魚女史……六四

文林

歌……德大寺實則……六七

仝……久我建通……六七

仝……津輕承昭……六七

仝……長谷信篤……六八

仝……松浦詮……六八

仝……諏訪忠元……六八

仝……宮地嚴夫……六八

仝……小出粲……六八

仝……三浦千春……六八

仝……岡部譲……六八

仝……大畑弘國……六八

仝……三輪義方……六八

仝……六八

仝……安齋篤敬……六九

仝……永石德文……六九

仝……近衞貞子……六九

仝……島津軸子……六九

仝……蜂須賀隨子……六九

仝……柳原愛子……六九

仝……小池道子……六九

仝……日野西廣子……六九

仝……保科節子……六九

仝……西四辻茂子……六九

仝……北島以登子……六九

仝……小笠原艷子……七〇

仝……三島竹子……七〇

仝……原田蒼生子……七〇

仝……鶴久子……七〇

仝……中島歌子……七〇

仝……服部磯子……七〇

仝……宮地擧興子……七〇

仝……田邊和氣子……七〇

仝……安東きく子……七〇

仝……内田ゆか子……七〇

仝……海上壽子……七〇

仝……師岡すが子……七一

仝……仝人……七一

長歌……海上壽子……七一

雜錄

御代拜……七一

御下賜金……七一

楠公首塚……七一

女子高等師範學校卒業證書授與式……七三

小學教員年功加俸國庫補助法……七七

大坂高等女學校卒業證書授與式……七七

奈良高等女學校……七七

高等師範學校生徒卒業證書授與式……七八

實業教育……七八

織物學校……七九

工業學校……七九

學術探撿……七九

臺灣學務部の計畫……七九

寶冠章……八〇

一哩の速力比較……八〇

人工孵卵……八一

新輕氣球……八二

其葉蓁々……八二

女隊消防組……八三

あやしき馬……八三

婦人の龜鑑……八四

貞松二株……八四

正誤……八六

敎の庭

兼題　歌　數百首
　　　文　數十章……其他くさ〳〵

口繪……永峰秀湖

挿畫……高橋松亭

阿姫



新版圖に對する婦人の覺悟

我が皇國は神代の古より、人々おのおの忠貞の心篤く、勇武の氣に富みたりければ、男となく女となく、おのがじゝ皇邊に仕へ奉りては、よく忠貞の心をつくし、敵讐に對ひては、よく勇武の氣をあらはして、つねに國威を揚げ國光を輝し來りて、未曾て一たびも敵國外患の侮を受け、國威を傷け國光を墜したることなし。かくの如くめでたくかくの如くたふとき歴史を有する吾人は、明治の大御代に會ひ、いともたふとくいともかしこき　天皇の大御稜威によりて、又更に國威を揚げ國光を輝し、その結果新に領土を得て、版圖を擴大する名譽に與ることを得たり。こゝに於いてかその天職も亦著く重大とはなれり。

抑この新に得たる版圖を開拓し、警護し、および新に歸服したる民衆を誘導啓發し、これに文化の何たるを知らしめ、皇國に對する忠愛の念を養ひ、皇國人と同化して、皇國の言語を操り、皇國の法律に服し、更に高尚なる奉公殉道の念に薫習せられて、

その眞心より天壤無窮唯一無二の我が　皇室に對し奉りて、皇恩の辱さに覺えず涙をこぼす至情を發するに至らしめ、日の御旗の在るところは、只死もてこれを守り、海ゆかば水づく屍、山ゆかば草むす屍、と謠ふに至らしめんは、一朝一夕の能くするところにあらざるべしと雖、今ははや凡百の設備、着々歩を進めたるのみならず、支那人は元來化し易き民なれば、我が　皇室の至仁至慈なる德澤の及ぶところ、彼等のこれに歸すること父母の如く、これを仰ぐこと日月の如く、不知不識の間に我が同胞と混化するに至らんは必せり。たゞ直接に彼等の啓發者となり、誘導者となるべき我が同胞にして、新版圖に移住すべき人々の責任の、至りて重く至りて大なるのみならず、我が内地の民たるもの、亦彼の移住者に對して、絶えずその聲援を與へざるべからず。所謂聲援とは何ぞや、即彼の移住者はなほ出師の軍隊の如きものなれば、内地の民たるものこれを見ること毫も戰時に於けると異ることなく、或は金品を以て遠くこれを犒ひ、或は心に彼等の勞を謝し、その子弟を敎育し、その家政を整ふるも亦つねに彼等の勞を想ひやりて、子弟にはその勤勉を勵し、家妻にはその節儉を務め、以て國家の精神を培養し、國力の根本を强うし、彼の遠き多

住せるものをして、心に悖むところあらしめて、内に顧みる患なからしむる是なり。
而して是等の用意、一に婦人諸子即家の妻たり母たる人々の方寸に在りといふべし。
彼の中古の頃、東方諸國より、防人となりて、遠く筑紫の警護に出向ふとて、丈部造人麿が、

大君のみことかしこみ磯にふりうのばらわたる父母をおきて

と歌ひ、大舍人部千文が、

あられふり鹿島の神を祈りつゝすめらみくさに吾は來にしを

と歌ひ、又今奉部與曾布が、

けふよりはかへりみなくて大君のしこの御楯といで立つわれは

と歌ひ、又大田部荒耳が、

天地の神を祈りてさつやぬきつくしの島をさしていくわれは

と歌ひて、雄々しく征途に上れば、また防人等の妻、即物部歳徳が妻椋椅部刀自賣は、

草枕たびゆくせながまるねせばいはなる吾はひもとかず寢ん

と歌ひ、物部眞根が妻椋椅部弟女は、

草枕たびのまるねの紐絶えばあが手とつけろこれのはるもし

と歌ひ、又服部於由が妻服部呰女は、

吾がせなを筑紫へやりてうつくしみ帯はとかなゝあやにかもねも

と歌ひて、かひ〴〵しくその夫を出立たせたりとぞ。あはれ今日の婦人諸子、またこの覺悟なかるべからず。

以上は婦人諸子の今日の天職としての消極的なるものに屬す。若その積極的なるものを論ぜんか今後の皇國の婦人諸子たるものその進みて移住の男子に從ひ、あやにかしこき　天皇の新治田を、遠く彼方に耕さん決心なかるべからざるは言ふまでもなく、新版圖には婦女子の極めて貴重のものなれば、かゝる心を起すもの獨身分賤しき族のみに限らず、教育有り身分有る婦人諸子の、亦進みて移住の志あらんことを願はざるべからず。又内地一般の婦人諸子たるもの多少にても、新版圖の地理風俗などを學び覺え、その家庭内に於いてこれを言ひ聞かせ語り聞かせ子弟をして幼年純白の腦中に、自然に遠征移住の念護國進取の氣を養はしめんこと、最必要とす



良婦論

坂本三七郎

袈裟御前が夫に代りて遠藤盛遠の刄に死するもの、世之を稱して貞女と云ひ、細川忠興の妻が一家を守りて身を殺す、世之を褒して烈婦と名く。貞女烈婦の解、殆んど二女の行爲を視て之を知るを得べし。貞女烈婦吾人は其志を賞して其情を憐まずんばあらず。彼等の境は逆境なり、彼等の終世は薄命なり。逆境と薄命、嗚呼是れ婦女子に望む所ならんや。世人が貞女烈婦を說き其傳記を傳へて世の婦女子に敎ふる者は是れ其極點を示導して、其至情の此の如くなるべきを指すのみ。豈に諸孃をして盡々貞女烈婦の如き境に在らしむるを願はんや。唯だ夫れ、志茲にあり、而して後に婦道全かるべく、女子の終身を遂ぐるを得べけれどなり。今吾人が良婦なる語を說て諸孃に敎戒せんと欲する是れ又、說わり。

昔、唐の名臣魏徴其主太宗に謂て曰く、臣をして良臣たらしめよ、忠臣たらしむること莫れと、良臣なる哉良婦なる哉、太平の君を補佐して政治を淸うし、天下をして太平無事に濟はしむるものは、良臣の功なり。庭に間言なく、一家和睦して、人生の樂を全うするものは良婦の力なり。彼の忠臣と云ひ烈女と云ふものは、已むを得ずして其境に遭ふ。又た己を得ずして其忠たり烈たる道を盡すのみ。豈に女婦子にして袈裟の境を欲し、細川夫人の行を望むものならんや。家を全うして夫を助け、情厚うして子孫を敎養す、女子の天職是に於て全く、其性情の誠是に於て足れりと云ふべきのみ。魏徴が太宗に望む所の者は、信に人臣の至情にし

て、諸孃が一家の良婦ならんことを欲するは、吾人が讀者に願ふところなり。

明治の天地決して袈裟御前の如き薄命なし。又た決して細川夫人の如き逆境の事なし。故に吾人は貞女烈婦死を守り操に斃るゝが如き談を説かず、唯だ讀者諸孃が一家の良婦たらんことを願ふ。又た諸孃に伴ふ所の佳婿は國家の良臣たらんことを切望す。

良婦の道は他なし。其心實の善良にして行爲の潔白なる、子を膝下に敎養して其道を愆らざる、夫を助けて内顧の憂わらしめざる、家計出納の道を全うし一家和樂の天地をして春たらしむるもの、之を稱して一家の良婦と云ふ。才あるを要せず、智なるを求めず、温にして厳、和して犯すべからず、而して柔性恒德、以て其女性を全うす。吾人は之を贊して良婦賢母と謂ふ。口に議論を闘はし、行爲女性に類せず、座作行歩の粗暴なる、今の婦女子其果して良婦の道あるか、是に於て吾人は今日の貴女令孃と稱呼する婦女を惡み、更に女學生者流の阿轉婆を排す。吾人は常に弟妹姪女に敎ふることなり。聞く西洋の諺言に羅馬法皇は、天堂極樂に入る門監たり、而して法皇は黃金の鍵を持す。故に世人の死して天堂極樂に遊ばんとするものは、必らず法皇に歸依し其黃金の鍵に賴りて、天堂の門扉を解かんことを願ふと、吾人は宗敎家にあらず、然れども一家の平和にして父子共に存し、兄弟故なく團欒相和するものは、是れ吾人が天堂極樂にあらすや。樂園に入る黃金の鍵は果して何人の手に在る、良婦なる哉、良婦なる哉、開閉一身にありて、天堂地獄黃金の鍵の左右に存す。花香うして鳥鳴く春風の天か、秋風雨を吹く落葉寂寞の時か。之を撰ぶこと諸孃心中の一鍵にあるを知らむ、婦女子の責任何ぞ輕しと云はんや、是に於てか、吾人は黃金鍵を與ふる良婦を求め、更に諸孃に良婦たるべき道を敎へんとする所以なりとす。

古來の歷史を讀む兒の大業を成し、天下に雄飛したる者は、其父か陶冶の巧少うして母の敎育多きに居る。而して其慈母は必らずしも學識多からず、必らずしも才智衆に超ゐず、英雄の兒何ぞ必らず英雄ならんや。才子の子、却て不肖兒多し、唯だ正直にして潔白、温柔にして女德を全うする良婦の膝下に養はれたるもの、常に麟兒鳳雛を出す和西頓の母を見よ、奈勃翁の母を見よ、更に小楠公の母を見よ、彼等は決して烈婦にあらず。又、貞女にあらず。世人は是等の婦人を呼んで良婦と謂はん。一家の妻たり母たる者は、吾人偏に良婦の名を得んことを欲す。貞女烈婦吾人は歷史的の觀念に於て、其名を忌み、其情を憐み、明治の天地唯だ良臣良婦の一家多からんことを望む。

糟糠の妻は堂より下さずとは、是れ良夫の至情にあらずや。糟糠の窮を忘れず、富貴に居て益々婦道を盡す、豈に一家の良婦にあらずや。位の高卑、家の貧富、良夫良婦は之と上下し、唯だ一點の組廢なく、又嬌態なし、吾人は常に豐臣秀吉の妻、淺野氏に感ず。瓦缸破席の間秀吉に嫁してより、終生婦道を全うす、淺野氏死して、大阪城亦従て陷る。彼は淀君の如き女傑にあらず。然れども淺野氏の死生は、豐臣氏の存亡に關するを、知らずや淺野氏は所謂秀吉の良婦にして豐臣家の良母なり。決して烈婦貞女と稱すべからず。德川氏の速に兵を豐臣氏に加へざるは、淺野氏の女德高うして犯すべからざる所あれぱなり。家康の奸雄尙は、淺野氏の至誠至情に感ずるや多し。良婦の女德是に於て大ならずとせんや。

吾人は既に良婦烈女の事を説けり、然れども良婦に烈女なしと云ふ勿れ。また烈女は良婦にあらずと信ずること勿れ。良婦の道は其常を説くなり、烈女貞婦は其變を示すものなり。寶劍室にあり、藏して光彩を見ず、以て良婦に喩ふべし。劍既に室を出で一閃陸離、是れ

烈婦貞女に比すべし、袈裟細川夫人は已を得ずして劒鋩を現はしたるものなり。順逆の境に處して、其道を全うす、日本女子の倘ぶ所は實に玆にあるなり。唯だ吾人は今日其順にして祥なるものを以て讀者に望み、逆にして不祥なる事は、之を説くを願はず。頃日烈女の事蹟を傳ふるものあり。感ずる所ありて良婦の論を寄す。

史談

阿女

壚井ふく子

あはれ、世の姫かゞみともなさまほしき孝女阿姫、ひめと云へど、富貴の家にはぐゝまれしにあらず。高等の教育などを受けしにもあらず。備後の國、御調郡、宇津戸村と云ふあやしき片田舍に生れ出でたる賤の女にして、父は半兵衛と云ふ農夫なりけり。ひめは年十六の折、同國世良郡甲山市の義八と云ふものゝ嫁となりぬ。義八田畠數頃ありけれど、ろを耕して父母を養ひ、また麻縷、絲綿、鍋釜の如きものを商ひて、家計をいとなみをりぬ。未だ二八の少女、世の常なれど、父母の膝下にまな娘とめでられ、花にあこがれ、野にうかれもすべきなるを、おひめは、さる小蝶のみだれ心は夢にもあらず、たゞ夫に、舅姑にまめやかにかしづきつかへん事をのみ、心かけ、飲食なども、舅姑と夫とには、別に精飯醇羹をとゝのへて進め、己れはひとり奴婢等と、菜根殘皆を共にして、つねに身をつゝしみ、用を節して、寤ても寐ても家の事を思ひに思ひにしは世にめづらしき少女なりけり。

舅姑既に年老いて、春夏のみじか夜さへ夢ばかりにはあかさず、まして、秋冬の長き夜は稲妻のはの光るにも、時雨の一しきり窓をうつにも、おどろきなどしてとかくにねざめがちなるに、姫は、舅姑のけはひする度、しはぶきの聞ゆる毎、必ず起き出で、之を伺ひ、肩を撫で、腰をさすり、枕の高低、衣の厚薄等を問ひ、やゝねぶらるゝを見ては、靜に、ふすまなどさゐぬやう、あつからぬやう、そのほど〳〵に心をつけぬ。かばかりに、姫は心の底をつくしてつかふれど、姑は沖のなごるの、深き心をも汲まず、淺澤沼のあさはかなる事多く、折にふれ、ものにつけ、あら〳〵しくのゝしりさわぎなどすれど、阿姫は、たゞ己が身を省るのみにて、敢てうらみず、さからはず、世に冷やかなる姑のしうちに對して、いつも春の日ののどけき心もてかしづきければ、姑の心もいつしかやはらぎて、遂には風波も起らず、奴婢等もみなそのやさしさになびかぬものはなかりしとぞ。あはれ、姫は、心も、行も、まことの姫なりけり。嫁姑の爭絶えぬ世の中に、嫁鏡とも、姫鏡ともなさなむ。

かくて、義八三十餘歳になりしほどに、ふと疾にかゝりしより、性すこぶる急暴となり、すこしにても心に叶はざる事あれば、怒りたけりて、食をも廢しなどするに、お姫は大いにうれひ、よろづに、心をつくして、慰めいたはり、その好む所を求めて、攝養怠らず。戰々兢々、深淵にのぞむ如く、氣をはかり、色を見、薄氷を履む心地して、あかしくらしし事、はや五六年に及びぬ、さるに夫の疾ます〳〵重くなりて、性のいよ〳〵急になり行くに、お姫は、いとゞ憐れかなしみ、輾轉反側するまもなく、心のあるかぎりをつくして、日夜看護するかたはら、舅姑を省み、實に衣帶をとかず、飲食も忘れてたゆみなくつかへしは、よそめにもあまりて、ほめたゝへぬものはあらざりしとぞ。

かばかりに心を盡せし、貞女が赤心、鬼神も感ずべきに、誠の天命にや、藥石遂に功なく、のち二歳ばかりにて、夫は遂にあづさ弓かへらぬ旅にいでたちぬるこそいたましけれ、姫のかなしみは云ふばかりなく、涙に身も沈みはてんばかりなりしが、己れかばかりに心よわくて、諸共に同じ道に行きもせば、老いたまひし父母を如何にせん、親に先立ちし夫の不孝をつぐなふは、自からのつとめなりとて、漸くに思ひかへし。形の如く野邊の送りをもすましぬ。

さて義八のいたつきに就きてより此方已に八年、醫藥の奉、薪水の費に、家產空しくなりはてけれど、姫は是非なくありし奴婢等にもいとまを與へ、躬みづから紡績して舅姑を養ひぬ。ある日姑茶を喫せん事を索めけるに、折しも茶竭きて、嚢中は空し。若きものなれば、やめもすべけれど、老いたるもの、まして日來望まるゝものはと思ふまゝ、密に己が衣を賣りて、以て之を買ひ、菓子餅さへそへて進めしとぞ。其他歳時の物、また日來好まるゝものは、力のかぎりをつくして備へすゝめ、夫のありし折よりは、いやまさりて孝情を盡しぬ。此事やがて官にきこえしかば、郡吏を遣はして、其舅姑につきて孝狀を問ひしに、我子不幸にして早く死し、唯此婦ある故に、足らはぬふしもなく世を安く送れり。誠にこの婦や、天資順善孝謹、已れを捨てゝ、たゞ我に衣せ、我に食はせ、我を保し、我を安んず。我等貧窶中にありながら、憂をも見ず、十八年を一日の如くくらせしは、ひとへに婦の力なりとて、涙に誠をあらはして語りけるに、郡吏還りて之を報じければ、國主も大いに感じて、粟五石を賜ひしとぞ。げにさるべきことどもなり。

享保二十年、阿姬年三十三なり。はじめ子七人ありし

虎松と云ふものを養ひて業をつがしめぬ。國主重く命を下して、永く其租税をのぞき、以てその懿行を表し、郡吏、其族人、及び邑長、村老等をして告げしめて曰く、れ姫幸に後あれど、汝等諸共にたすけて之を敎育し、家をつがしめ、よく、れ姫が舅姑に事へたる如くにつかへしむべしと。れ姫此命をきゝて、たゞ感涙にむせびて、かへさん言の葉も知らざりしとぞ。さて郡吏は、なほ、宇津戸邑に至りて、生みの父を召してれ姫の孝貞を告げ、かつ、その祖を問ひけるに、性は内海氏とて、嘗て山城の守左京亮なるものなりと云ふ、世變り時うつりて、子孫久しく民間に下り、また徵すべからず。よりて家に藏めありし古文書數帖を見しに、誠に其舊家なるを知りて、れ姫が賢もまた由る處ありとて人々感じ〳〵て歸りたりとぞ。あはれ、身を立て道を行ひ、父母の名をあらはすは孝の終りなりと云へるが、れ姫の如きは誠に孝を全うせしものと云ひつべし。

荒木田麗女傳

井上頼文

慶長元和よりこのかた、文學の勃然として、天下に興起するに及びてや、歌よむ人は雲の如く集り、文かく人は霧の如くに充ちぬ、しかはあれども、わが四大人の流を汲み、大義名分をあきらめたる人々の外は、れほむね、たゞ、吟風弄月の詠、翫花賞雪の文にふけり、いたづらに錦心繡口の名譽をてらはんとするもの丶如くなりき。

思はざりき此の時に當りて、獨我が國史の闕けたるを慨歎し、孅々たる纎手もて、うるはしき筆を、歴史の上に振ひたる一婦人あらむとは。

世に四鏡とよびなせる、水鏡、大鏡、増鏡、さては、

今鏡は共にうるはしきかな歴史なり。
然るに惜いかな今鏡は、高倉、安徳兩御代の事闕け。增鏡は、後醍醐天皇までにてやみにき。その闕けたるを補ひ、足らざるを增せるは、實に、月の行方と池の藻屑なり。
此の二書は、實に國家有用の文字なり。既に此の書の國家有用の文字たることを知るものは、また其の作者の功を記臆せざるべからず。
嗚呼此の作者は誰ぞ。
世はこれ、吟風弄月の詠に醉へる時、翫花賞雪の文にすさめる時、獨毅然として、筆を此の國家有用の書に揮ひしは、そも有髯男兒か、否、學士學匠か、否、實に嫋たる一婦人、荒木田麗女なりけり。麗女は、梗倉（一代釜谷）權之進、荒木田武遠の女。慶徳陶繭、秦家雅妻。

らんと思ひながら、暇なき身は心に任せず過つるに、かゝるもの見ずやとて、橋村正環ぬし、ふりはへて貸したまひぬるものこそあれ。これ實にかの麗女のみづからものせる履歷めきたるものなりけり。かく世の中に功績ありし人の事蹟は、何人も、知らまく欲する處はた、かゝる人の事蹟を、世にあらはすは、吾人の任とすべきことなれど、今、其の自傳を掲ぐることゝはなしつ。
されど此の文は、傳寫の誤りにや、假字違ひのあやまれる、はた係結のたがへる處さへまじりて、さばかり彤管の才ありし人の筆つきともおぼえぬ條などあるは如何にぞや。つらつらこの飽かぬふしぶしあるを思へど、此は必ず後に書き改めんとて、かりにかきやりたるものなるべし。されど、今、假字のたがへる處々を正せるのみにて、いかゞとおぼゆるふ

實なり。

また、本文中に記せる人名の下に註を加へたるは、橋村正璟ぬしに問ひて　れのれが加へたるものなり。なほ麗女の事蹟につきては。他日さぐりて、ふたゝび本紙にかゝぐる事あるべし。

慶徳麗女遺稿

初の名は隆、後故有て麗と改、紫山は其號なり。（北海子付らろ）又清渚と號。（三付らろ）角字は子奇瀧川、（付らろ）幼きより和漢の書を讀まむことを好めり。兄弟皆男子なるにより常に其ふるまひを見習ひて、女子のわざをさらに學ばず。七歳にて入學せむことを願へども、女子の無用の事とて父母更にゆるされず。せむかたなきまゝに、兄武世の讀るゝを聞て大學をかつ〲覺ねてそらによみけるにぞ、兄正富强て好けるを賞して、古今集の序伊勢物語等をよませらるゝにより、いまだ手習はせざれども、假名文字讀覺ねて繼松などをもとれり。八歳より九歳までにいろはの手習をもして、又論語孟子をも習へり。物よく覺ゆるよし聞て、臼田陽山弟子になすべしといはるれども、無益なることとて父母聞入るゝことなくてさし置るれど、いたづらに童遊などにて過すを、我く々いと本意なきことに思ひて、兄武世の講席に臨むとて書を懐にして朝毎に出行るゝを常に羨みて、はかなき假名草紙にても只讀て覺ねむことを好めり。兄息雅（中西平大夫息雅）は唐大和の軍書を好みて其物語などせらるゝことをうれしき事にて、朝夕此人の宮仕怠らず。十二より裁縫のわざと女子の習ふべきことども習はすべしとて、正富書に心をよすることを制して琴を敎へらるゝによく覺ゆるやうなれどさらに心には入らず。十三にて伯父武遇（慶徳藤左衛門　號木田武遇）に養はれて子となる、ろなたに行たり。武遇も書など好まるれどたよりある心地すれど、しひて學ぶ事はなくて、只軍書など見るのみなり。武遇は妻をうしなはれしかど、母とする人なき

ゆゑに、おとなしき婢女を置て、裁縫等を習はして養育の道おろかならず。愛憐のあまり物よく覺ゆるをよろこばれて、十四より詩文の類、文選等を敎らる、又歌を父の好まれけれど、十五にてはじめて歌の道を尋て心安き師につきて習ぶやうなる。連歌は元來好こともなかりけるに、親兄の勸めにしたがひ、十六にて習ひはじめたり。兄正紀先達にてみちびかるゝやうなりし、十七にて浪華の西山昌林の門に入りたりし。程なく面白きことに思ひて學問に怠りて專ら歌書に心入りたり。十九まで他事なく晝夜心にかけけるにぞ、かつ〳〵稽古に成就しけるよし師も申されき。其後昌林もうせ給ひしにぞ、二十一にて洛の花下里村昌迪の門に入たり。是は女子の連歌は稀なりとて、ことに賞して入門興行の一會もこなたよりすることとなるを、あなたよりせられたり。是は兄正紀。（橘村内藏正紀本より門人なり）[illegible]都にのぼりてる行なり。[illegible]

より病多くなり、又父武過も過行かれ何となく浮世をふるいとなみなどに暇なく、爰なる連歌の人々も多くは失行などして心にはかけながらおのづから怠りがちなるに、兄正紀も身まかり給ひしかど、我のみのこりて、時々獨吟點取の卷など都につかはすのみなりけるに、昌迪師さへなくなり給ひぬれど、いよ〳〵此道すたれゆきたり。今は一向に忘れたるやうなれど、世の人はしり聞て時々勸すもあれどさらにうけひかず、中々むづかしうさへ思ひたり。かくて年月うつりて三十にもあまりて、明和のはじめの年ゆゑありて都にのぼりたり。昌迪の後、昌桂の門にも入てあるに、又一昨年より、里村紹甫の許へも音信おこたらで此折も往來して、連歌の道學ぶやうにて、昌桂仝居なる玄息、其外昌迪門人の人々にも心安くなりて、度々席にもつらなり、錦天神の會などにも招かれき。仝じ年の秋九月都を出て、浪華に行て[illegible]度ても住べきなりし。其所

にも連歌の友ありて、天滿天神の會に出べきよしねむごろに聞ゆる人々あり、されど爰にてはさやうの交は思ひ絶て、深く人にも忍びて住むべきなりけれど、我としられんことを厭ひて、俄に名をも麗と改たり。かくても難波の住居の物さわがしく、問來る人も絶ねやらねど、いかでしる人なき所に住むとて、住吉に行たりし。こゝはことに靜にて、問人もなく心に叶へり。又歌をも思ひ出て、夜々のたのしみとせり。其年十二月故郷に火ありて、家も燒にしかど、旅住すべくもなく、いそぎ家作るべきたよりをのみして、同じ二年四月又難波にうつり住て、霜月都にのぼり、夫より故郷に歸りたり。此間のこと、須磨の寢覺といへる記文あり。程なく家も作果て、同じ三年五月良人難波に遊行せられける頃、遠き國よりとていかにぞ家は作りしや、ことなくて有やと訪來れる人あり。誰にやと見れど、伊豫國宇和嶋侯の御舍弟にて、一昨年京にて、宇山有可軒と聞えて、花下なる連歌の席にて、心安くしける御方なり。あきれまどひて、見苦しき所にもしだしなどいへど、忍びて神詣しけるもればくは友をたづねむためなり。御師へゆめ〳〵しらせそと口かため給ひ、是より京にのぼるなり。昌桂昌甫などに言傳やある、おなじくはもろともにのぼりてよ、いざなはんなどねんごろにの給ひて、立ながら歸らせ給ふ。雨のふるに歩みて、供は十人ばかりにて、いたく忍び給ふとて急ぎ給へり。程へて後は、津國朝日の青木侯とぞ聞えし、其後爰には連歌怠りがちにてたよりも覺束なし。其頃よりいとまある折々書を見ることをのみして、家に書の乏しきまゝに、宮崎文庫より借て通鑑綱目、又詩の書、和歌の書等を年重ねてしづかなるたのしみとせり。良人又書を好み書寫などせらるゝも、いとたよりあり。又裁縫のいとまに、阿蘭布を摸しけるを、人々興じて望まれき。十種香など習ひて、是も心に入る

やうなれど、女伴のなきによりて稽古もはかぐ〳〵しからず。香包をも手づから縫習へり。又空穗物卷（編者いふ卷は語の誤なるべし）廿卷なるを、良人東行の折から求られける。時々に見るに、更に讀得がたく、一度二度さし置し。されど其儘に捨置むも本意なくて、明和五年春、良人攝津國に遊行の跡、ことに徒然なれど、空穗物語取出て再遍讀たるに、やう〳〵心得るやうなり。誤字と見ゆる所多く、一二の順違るさまなれど、見るにしたがひて、押て一二の順をあらためみるに、いとよくわかり行やうなり。良人家に歸られて後、かくといへどよろこびて、やがて朱して改らる。夜な〳〵校合をもして、誤字をも改め、目錄系圖をも書たり。同じ年より詩をも作るべく、良人勸められど、是は才力なくていとかたきことにしけるを、しひて催さるゝも詮方なき、折しも姪興正（興正號は南陵釜谷氏）が京に遊學しけるをたよりて、（江村北海名は綬、字は君錫、通稱は傳左衛門、宮

（年七十六）の門に入も、はかぐ〳〵しくも得せぬことゆゑはづかしく思ひたり。又其頃より歌の方に心入て、和文をかつぐ〳〵書習ふ。是も良人好みにて、時につくの辭、豐臣大江等の辭なり。夫より日本紀をはじめ、我國の國史類、諸家の記等、又公事の書、有識の書の類など見るにことに、面白く心とゞむるやうなりしかど、又良人更に假名國史に似たらんことをも書出よと望まるゝにより、池の藻屑を書たり。是は北海先生の序あり。跋は岩垣亮卿（岩垣龍溪、名彥明。字亮卿京都の人）なり。後三角先生（三角、氏奥田、字は嘉甫、小字は宗四郎、幽汀と號し、また南山と號し、また三角亭と號す。伊勢の人、津侯に仕ふ）も序を添らる。次に月の行方は野公臺（野村東皐、名は公臺、字子賤、新左衛門と號す。江州彥根の人、儒を業とす）の序あり。又作物語をも、書てよとあれど、桐の葉、小手卷等書てより、續て數多書あつめて書林などにつかはしけれど、さのみめづらしくもあらぬ物故、後にはなかど反古になしき。又、山の井廿九卷は作物語に公事を

へり。良人世の交を嫌ひて閑なるを好み、常に書を寫すことをのみせらるれど、我も亦筆とることをたのしみとせり。詩はことに拙く見苦しけれど、人に見すべくもなくて深くかくすやうなるを、程經ておのづから人も知て、洞津の文學三角先生、古稀の壽詩を望まれて遣しけるより、やがて親しくなりて、あなたよりしば〳〵良人へ文有て、いかで對面せむとあるにより、良人に具せられて、先生の里なる豊原に行たり。又先生も折々爰に渡り給ふ。心安くなりて、洞津の藤堂候より命せられて、孝婦の辞を書て奉れり、池の藻屑、月の行方、桐の葉は、三角先生みむと有て遣しけるに、藤堂大僕子、其姉君武子、藤堂候の御隱居御覽あり。武子よりは、河原物語とて自作なるを見せらる。此次年 空穗物語讀合を願ひて、目錄系圖を遣しけるに、武子の自筆にて、少し相違の所を改給はり、中院通茂公の御自筆の本借し給はりけるに、我改しにかはることなし。大僕子よりも、折々音信有て、藏書をも貸給はりき。又藤堂家御隱居の御賀に、題を賜はせて。詩を召せけるにより、老子出關の圖、月仙子の筆なるを添へて、絶句を奉れるに、包帋に正四位下荒木田武遇女と書けるにより、御賀の日他門なり位階も有とて、御家門諸候方の進物の間の末に置きて、家中の類にはあらざるを、面目ありて三角先生もよろこびのよしいひこさる、又阿蘭布を摸したるを、三角、北海、草廬（龍草廬、名は公、字は君玉、草廬と號す。通稱は彦二郎、後に衛門と改む。伏見の人、彦根侯に仕ふ）などおくりたるに、各詩をもて謝せらる。大僕子も所望にて遣す。月仙師（伊勢の國、宇治山田、寂照寺の僧）は畫かくべく勸られて。手本をも給はれと、是はことに堪ぬことにていと見苦しき。又若き人々連歌すべきよし望まるゝあり。さき〳〵も聞え出る人あれど、心もとめず、かりそめの事にて過けるに、今は此地に連歌する人なくて、宮崎御文庫の會も絶ぬるを歎かしう思ふ人々もあれど、

いかにもして再たこさむの願にて、人々をも道びくやうなり。安永六年遊行して彦根に至龍世華、海老江氏、野公臺を訪うて、夫より京にのぼる。道に守山の宇野醴泉先生（醴泉、名は元章、字は成憲、近江守山の人、博聞強記詩書を能くす）を尋て逢たり。洛にての舍は北海師の家なり。兼々あなたより消息ありて行けるに、師は播磨路に遊行のみしなれど、龍川むつまじうもてなさるれど、心安く日を重ねてとゞまれり。相國寺に詣て、蕉中、維明の二師にまみゑて、天龍寺にて弘道師にも逢たり。龍草廬兄も京に居られて度々行通ひたり、此師も池の藻屑書ける頃より、心安くこと通じける。京より浪華に下りて、細谷、頼、橋本、岡、蒹葭堂、畫師の森蘭齋など訪て、夫より須磨明石みむとて播磨に至り。法華寺に訪て、三草に行たり、爰はもとより知己ある所なり。次手に天橋立に行かむとしけるに、雨がちにて道いとあしきよしいひて去ひてとゞむる人あるにより、思ひ過ぬるにも本意なし。又難波に出で、ろこより、吉野の花を尋ね、紀路に行て、粉河、若浦に至り、蘭嵎先生（伊藤長堅、字は才藏、蘭嵎と號す。仁齋の弟五子、平安の人、紀伊侯に仕ふ）を尋ねて、三角師の文をも傳へき。大和國より家に歸るとて、先奈良に至り、岡村何某の家に舍りたり。是も兼ての契にて、年頃待居りたるのよしにて、しひてとゞめらる。爰には連歌の人々多くて、林田氏に招かれて連歌あり。篁何某は拙き詩に次韻して發句をも添て送らる。大東三位、富田三位とて、社家にて連歌すぐれたる人あり。林田氏にて始て逢て、又の日大東家にむかへられき。連歌終れど、富田林田の二子餘波惜みて旅宿まで送らる。道すがら猿澤の池の月面白さを賞して、各醉に乗じたるたはふれごと聞ゑかはして夜いたく更たり。又の日奈良を出て、笠置の方より歸るとて、豊原に立寄、三角先生に逢て、次の日家に歸りぬ。此遊びの事は、初午の記あり。賴千秋の序あり。同じ年の五月五日より、野公臺のもとに來た

れる僧は、明照寺の中なる德法寺などいへり。御師もなくて爰に一宿を乞るゝを良人むつかしげにせられど、公臺より頼みこされしによりとゞめたり。神拜もさのみ心にかけず、わづかに豐受の宮の近ければ、ここに詣らるゝのみにて、只終夜物語せむとなりけり。書の事ことに心入らるゝやうなれど、日頃床しくしける。北山抄、西宮記は聞及けるに尋ね出て見すべきよしなり。又空穗物語を買たりといはるゝにより、讀解き難き事を語て、目錄系圖を遣す。藤の岩屋も見つとて、桐の葉を望まるゝ故、是をもつかはす。さて歸られて後、公臺より文細やかにてことのよしもいひこさるゝに、是は明照寺上人にて、庭田一位卿の御弟なり。有のまゝにては、かろ〴〵しき遊びも來がたしとて、しのび包みて名をも出されざりけるとぞ。こなたをも欺きたるやうなれど、返す〴〵もことわりて、此後は心安くいひ通ふべきよし、主人よりもねむごろなる御文あり。始て驚きて、おろかにもてなしけることを耻しう思ひたり、其後北山抄はしづかに見て、御文庫に納めよとて給はせしかど、良人書寫して後、文庫に納めき。西宮記は庭田家より文庫に納めらるべきよし聞及しかど是は沙汰なし。庭田家御文庫の書をも借給はるべきなれど、寫本は其名の覺束なくて申出ることもなし、五十になりたる年、連歌社中の人々賀の催しあるにより、年始に自書の蘭竹梅など寫して、其かたはらに詩歌も書て國々につかはし、諸家に詩歌を乞たり。賀筵は誕日ゆゑ三月十日と定めたるに二月末白子より發句など送られたるのみにして、何國の音信もなかりけるに、三月九日朝より暮るまでに、京、難波、彦根、津、豐原何れも集れり。詩歌取々なり。武子は歌、大樸は詩を給へり。其の折、末の松山の松枝にて作れる筆を武子へ參らせければ、すなはち返しに歌あり。又武子の六十の賀に、三千歳といへる菓子

を添へて參らせしかど、あなたより賀の祝物とてたまもの二種あり。其頃作物語に遊仙窟を模して書たるを、桃源と號たるに、藤堂御隱居御覽ありて、和文にはこはぐ\しき名なりとて、藤の岩屋と改め給へり。其同し趣なる野中の清水は、本居宣長何國より傳はりけるにや見て難じて返されしかど、則陳し遣す。後は三角先生取次にて難陳再三に及びて終にしたがはず。安永六年連歌社中、久保倉弘典誘引せられて、駿河國靑島村の靑島何某の母女の俊女神拜して尋らる。歌の道に心ざし深くて見るべき書などの事問て、弘典の家にとゞめられし中は、しどく\文通はし、歌の添削をも乞れける。こゝより都にのぼるとて出立の程は、餘波惜みて餞別の歌をつかはす。返歌も有。又初午の記文を遣しければ、よろこびて道しるべとなして、播磨大和などめぐられし。國に歸りて後も、絶す文通しなどせられき。天明二年の春、又遊行[illegible]

るとて、都にては草廬の家を舎とせり。歸る道兵庫にて歌讀人有りて、しひてとゞむるにより、四日はかり居て、其所の舊蹟尋ねなどして、後難波より大和路を經て、初瀨の花盛なるを立寄りて見る程、陸奥白河候の家子なる人に行逢けるに、土產にすべしと望まるゝもいなみがたく、短冊に歌書てつかはす。此折もまた後午の記あり、乳熊の悟心禪師も音信有て詩を送られ。又歌をもよせられける、是よりも次韵なども、歌をもつかはす。家に一宿などせられて後、觀世音信心せよとて畫像をめぐまれし。五十の時賀章を送らる。今は五十にもあまりけれど子などやしなひて、その育みに何事をも捨置ぬるやうなれど、連歌は良人も好まれ社中もあれど、捨かたき老のたのしみとなせり。是は年頃の事にて、世の人多くしり聞ねてあれど、遠き國より尋ね來る人々の絶ぬを、さすがに心しづかならず思[illegible]

東武の女子の筆なる孔明の畫の讃すべき仰言もいなみかたくて、發句をも書て參らす。次年に發句歌等をも召されき。又一族の御方より來年の月毎の大小の書きたるを得給ひ、其返事和文代作に書べきよし仰にて、是をも參らす。此事は天明六年の冬なり。年のいとあしけれど、物書ことの見苦しう物うくすれど、世の人はゆるさず。扇短冊をもて來る人はなべてのことなり。常に絶ぬも詮方なきまゝに、日を定めて、月毎の廿五日に書べしと人にもいへど、二十二日の頃より、いと數々に文机につむやうなり。すべて一日には書あへず。又の日に及べり。是も春夏の中はさのみ多からず。葉月より霜月までは數多なり。旅立人の其國々へもて行くなりけり、さてろ連歌社中は新暦と名付たりし。歳のろふまゝに、手のいよ〳〵震へど、寔に物書事堪かたきよし人々にも告けるにぞ、寛政はじめよりはすこしすくなくなりたり。今は洛の花の下も昌桂師子なる昌逵なり。かなたより連歌の田舎宗匠をゆるすべし。かならずのぼりてよと懇に言こされしを、深くよろこびながら、今はいたく老て遊行も堪がたく、連歌も物ふりて、當時の風体にもあらず。元來我身のたのしみと思ひてあれど、拙き名の世に廣くならむことは願はしからず。れいのくさ〳〵しき心にて、かたじけなきよしいひて、かたくいなみつかはしたり。同じ時、豐後國、賀久惟次、田舎宗匠の號ゆるされて發句を送られし。是よりもよろこびの發句つかはしぬ。寛政三年七月、東武柳營の御連歌師、瀬川昌德、國々遊行して尋ねられしかど、文庫の會へも招したり。御師の家に暫く舍りて、内宮へもゆきなどせられて、月の末に我家に一宿して、即出立る。連歌のこと讀合程に秘る事をも惜まず傳受せられき。其后良人病していく程なく失給へど、今は此道思ひ絶ぬべきを、遺言もだしがたく立繼て御文庫の會 勤ん人も有らざりけれ

ど、詮方なくて御文庫の會、家なる月次の會も勤めて、子なる佳包にも學ばせたり。享和はじめの年、七十に滿ぬるを算へて、佳包は賀のいとなみをしつれど、我は人々をわづらはさむことをはゞかりて、親族の中連歌社中歌讀習ふ者のみなり。かく齡のつもりぬれど、筆取ることの堪がたけれど、同じ二年より物もかゝじと誓ひをもたてつべけれど、さてのがれがたきこともあれど、さのみにはえせねど、大方はのがれがちなり。短冊などゐて望む人には、もと書たるをつかはすに、それも數多度々になりゆけど、貯へしも多からずいとすべなし。

（完）

月前柳　　桑門辨玉

うちなびく、柳の糸は、おく露を、玉とあざむき、出る日の、たゞさすあした、暮る日の、かぎらふゆふへ、赤玉と、秀つ枝につらね、しら玉と、しつ枝にぬきて、瑞玉の、眞玉の糸と、中つ枝に、月なかすめて、よるはかけゝり、

いけ花（十六）

紅梅の活あげ

田邊和氣子



一重切花筒に、紅梅一種活上るには、例の如く眞副体の寸尺を三ッ割にして、少したため直し、眞の枝にて花筒をれはふ様のかたちにし、副は窓の中程より、斜に横へさし出す様にすべし。體は窓より上へのぼらざる様にし、且右の方の窓の柱へ差つかへざる様心すべし。眞副體の外に、あしらひの枝は、よき程に見計ひ加へてよし、但し此活かたは、枝數多からざるをよしとす。又體に他の花を用ゆる事もあるなり。これも

例の如く、色の取合に注意すべし。

山椒に白てうじ

山椒は梅に同じく、其木質もろくして、折れやすきものなり。ゆゑによく枝ぶりを見たて、例の如く眞副を定むべし。眞の後へは長く小枝のさし出ざる様工夫し。體なるてうじは、枝の恰好を見斗ひ、二三本用ひ、花数は五か七にして、殘りは切りとり、葉の先の副に差支る所は、手にてつみとり、おのづから虫食ひの如くにすべし。眞副の花も茂りたる處はよき程にはさみとるをよしとす。



たちぬひ

西山たい子

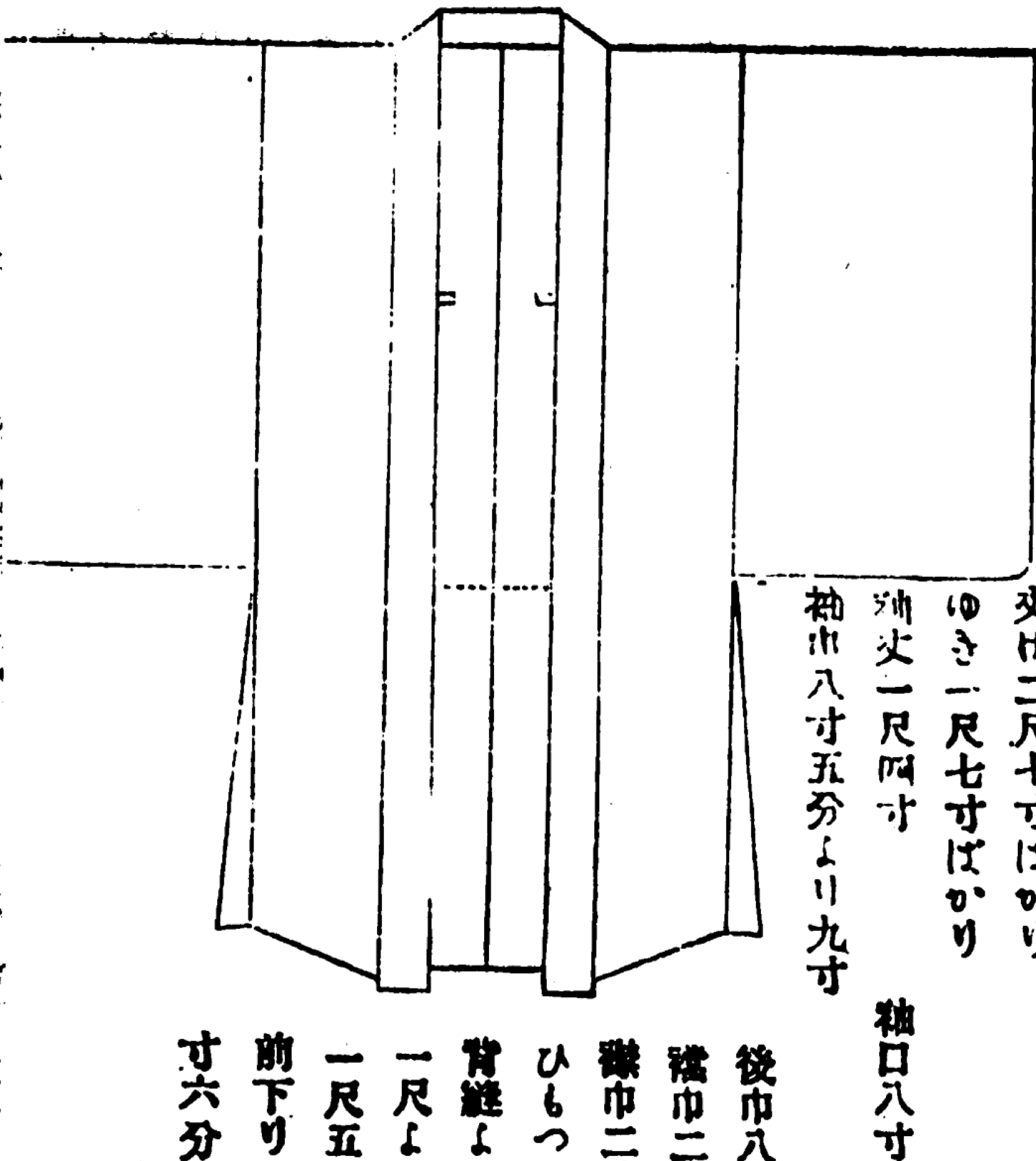
(卅)袷羽織の縫ひ方

袷の衣服に云ひし時の如く、まづ袖を四つ縫ひにぬひおきて、さて、身衣の縫ひ上りの丈を定め、兩身衣の背、及び兩脇へ丈のしるしをつけ置き、丈くらべをして、兩身衣とも、裏と表とをはぎ合せ。それより、はぎたる身衣を、表より裏まで、背と背の表と表、裏と裏とを合せ、その合せたるものを二つに折り、襟方及び裾の方などをよく合せて、四つ縫ひに縫ふなり。但し、左の身衣に右の身衣を包む如くにしてぬふべし。さて背をぬはゞ、前の方も同じ丈けにして印をつけ、前下りを綿入の如くにして下げ、裏身とはぎ合せ、脇明をきめ、後巾を定め、襠の丈けを定めて、巾などをも見て、筋をつけ置き、一方を後身に包みて四つの縫ひにつけ、一方を前身に包みて四つの縫ひに付くるべし。兩脇とも附け終らば、襟方より襟まはりを裏表合せて、表と裏とをとぢ置き、紐附の下りを見て、ちを裏の方につけ、襟をもまた裏の方につけ、表にてくけるなり。羽織の襟は、襟先きを先きにぬひ置きて、ぬふ時には、ぬひこみを諸共に縫ふべし。さて、それより袖をつけるなり。袖の附け方は、衣服と同じなり。男物も、女物も、小裁ものも、皆縫ひ方は同じなり。たゞ袖付、及び寸尺などの異なるのみ。

前下りをなすに、左の如くなせば早くて便利なり。まづ初めに、縫ひ上げの丈を定め、後ろの身衣の裏と表とをはぎ合せ、前をも後ろの丈けと同じくしるしを付け、前下りにぬひこみを加へたるもの丶二倍、即ち一寸下りをせんと思はゞ、これに三分ばかりのぬひこみを加へたるもの、即ち一寸三分、それを二倍したる

もの即ち二寸六分だけを長くなして、裏にとはぎ合せれくべし。さて背を縫ひ、襠を後をも、前をもさきにつけて、前下りをあとにするなり。されど、下りを爲す處、丈けくらべより、袷なれど二分、綿入なれど三分ぐかり裏の方にかへりたる處にて、下りだけをつまむやうになし、ぬひつけぬやうにして置くなり。さて其つまみたるものをすぢかひに縫ひて下るなり。男物の内揚なども、かうやうになすときは、早くして、一分二分のくるひは、ぬひこみにて、よきやうになるもの故、大に便りよし

男羽織縫上りの圖



だいどころ

調理の仕方はもとより臺所に必要なれども、此の外になほ臺所はたらくにつきて、欠くべからざる事どもいと多かり。ろをかきしるすは年若き人々の參考ともなりなん歟。兎にも角にも思出づるまゝを掲げて臺所讀給ふ君たちに問まゐらすになん。

臺所を整理るにつきて心得べきは、節約、淸潔、機轉の三者なるべし。此三者はもとより人の美德なれど、何事にも混ましきものにて、殊に臺所にて[illegible]

ふにはあらねども、臺所に此三者無きは鮮魚、新菜、美醬、佳香に事欠くよりも、なほ甚しき欠點と思はるゝなり。節約無き臺所は一家經濟に害有るはもとよりにて、其上、他より其狀態を窺ふときは、何となく不取締に見え、主任者の人と爲卑しく思はるゝなり。又た清潔は食物に關して味と均しく、或は味よりも一層大切なるは如何なる美味も、其不潔なるは人の食はざるにて知るべし。ゆゑに臺所一切のものは總て清潔の上にも清潔をつとめざるべからず。さて節約清潔と均しく機轉を必要なりと云ふは、上戸に汁粉を進め、下戸に酒を強ふるは云ふまでも無く、總て人の嗜好に應せざるものを進めざること肝要なれどなり。且つ寒暑と時機の關係に從ひて調理を擇み、又は不足なる原品にて、人の嗜好に叶ふべき料理をつくる抔は、みな機轉によるものなれどなり。されど此三者は臺所整理に於ける第一の心得と爲すべく思はるゝなり。

〇流走に切屑飯粒など散亂し、諸器具の其位置にあらざる類は總て見ぐるしきものなり。

〇厚く客を饗せんとて料理に手間取り、徒らに客に時間を消せしむるは、不注意と云ふべし。

〇色の配合と器の撰擇は總て料理に肝要なり。器と色の配合宜敷からざれど如何なる滋味も半は其力を失ふと知るべし。

〇味は胃に在りとは古哲の格言なりとかや、されど時と場合により、それ〲の調理を要す必ずしも山海の珍品を美味とせざるなり。

〇味は實に胃にあるも亦た意想の如何に味の屬するは、爭ふべからず。色と器のつりあひを要するはれこが爲なり。

〇器の好には限なく、只管之を吟味すれど、贅澤に流るべし。出來得るかぎりに注意して清潔を旨とせど、いかで數の多きと品の貴きを求むる必要あらんや。

櫻の花漬

櫻の花を採り好くわらひ、一週間程鹽漬となしれき、さて鹽水より揚げて更らに梅酢にて壓石なしに漬けて、器の口を密封し置くときは、見事なる櫻漬出來るなり。

木の芽田樂

豆腐を俎の類に置きて、水をきりて之を横五分位の拆形に切り中央に横に庖刀をいれ、串に貫して燒き、火鉢の上に兩面より好き程に燒き、木の芽味噌を塗るなり。扨て味噌の作方は先づ木の芽を洗ひ、之を擂り、漉したる味噌を加へ、又た味啉に砂糖少量を加へて、味噌と木の芽を擂り交せつゝ好き程にノバスなり。

菜飯

撒りて熱湯をとほし、飯を移すときに此の菜を混交るなり。

このごろ

鋤柄義子

つばくらめは去年のふる巣をたづねて來りかりがねは花のさかりをみすてゝ、人にをしまれながら常世のくにゝかへる。都も鄙もれしなべて、花のさかりなれど、「一年に再度とだにくべき春かは」とて、人々の心も花にあこかるゝなるべし。もろ／＼の草木芽いでゝ樂しきころなり。さてこのせつ畑などのものに必すべきは、

まくべきものに、

ごぼう、　にんじん、　亞麻（リンネルを織り、實は藥品とすべし）　はるうだ、　なたまめ、　かきまめ、　さゝげのるゐ、くさはゝき、　とうふう、

うゑかふべきもの、
すゐくわ、　とうぐわ、　すゐせんじな。
つぎゝ
ゆづりは、　みかん、　きんかん、　ゆず、
だいく、　びは、　ひのき、　まき。

杉、檜のなへうゝべし。藍はこのせつまきても出るなり。室に入れ置きたる植木とも取出べし。このころより、菊に虫のつくことあるべし。よく注意してとり去るべし。又茶其他の草木に毛むしのつき、菜、藍などにもつくなり。これをとり去るには、よもぎ十斤ばかりをよくせんじて、其汁一斗ばかりに、きざい二升ほどいれて、又石灰半斤、いわう半斤ばかりつゝを交へて、なほよくせんじて、冷して後、葉より根もとまでろゝぎかくべし。二度ばかりすれば、虫みな地に落ちて死すべし。



日本文典（八）

壇井正男、

第三、事物を指し示す時などに用ふる代名詞

これは、世の文法家は、指示代名詞とよぶ。例へば「この花は美なり」などいふこの如き詞なり。澤山の花ある中に、一ッを取り出でゝ、この花と指し示すやうの時に用ふる詞なり、これにも極めて近き物に用ふると、やゝ離れたる事物に用ふると、遠く離れたる事物に用ふるとの別あり。例へば、

この主人と住家と、無常を爭ひ去るさま、いはゞ

朝顔の露に異ならず。(方丈記)

これやこの行くもかへるも別れつゝ
知るも知らぬも逢坂の關(後撰集)

の如く、このは、最も近き事物を指し示すに用ふ。又、「その」はやゝ離れたる事物をさし示すに用ふ。例へば、

その時、おのづから事の便りありて、津の國今の京に到れり。(方丈記)

また元暦二年のころ、大地震ふること侍りき。そのさま尋常ならず。(方丈記)

くれがたき夏の日ぐらしながむれば
その事となくものぞ悲しき(伊勢物語)

の「その」の如し。また遠く離れたる物をさし示すには、「かの」といふ詞を用ふ。例へば、

かの地獄の業風なりとも、かばかりにとぞ覺ゆる

かの見ゆるたづのむら鳥君にこそ
おのがよはひをまかすべらなれ(貫之集)

の「かの」を見よ。また「かの」の代りに、「あの」といふも同じき事なり。

斯の如く、近き遠きの區別あるなり。此の代名詞と普通代名詞といふものと、よく似たれど、自らしるき別あり。前にあげたる普通代名詞といふ方は、名詞の代りを爲すなれど、この指示代名詞といふ方は、其の名詞の上に立ちて其の名詞を指し示すなり。例へば、花、月といふ物の代りに、これ、かれ、それなどいへば、普通代名詞の方なれど、更に其の花、月といふ詞の上に立ちて、この花、その月などいへば、この、そのは、やがて指示代名詞なり。即ち其の花、其の月を指し示すやうなるなり。

第四、百般の事物場所、方角時など、すべて物

へて用ふる詞

これは、數多あれど、一々かいあぐるもわづらはしけれど、概は盡くはあげず。其の定かならぬ物の種類によりて、自らそれ〴〵これに代ふるに定まりたる詞ある如し。例へば、人の定かならぬ時には、多く文には「誰れ」を用ふ。古言にはたといへるあり。今は俗言には「だれ」と「たれ」を濁りていふが普通なり。又、文にはたが、たぞなどいふこともあり。

御室に、つくや玉垣、つきあまし、
　たにかもよらむ神の宮人(古事記)

秋風にはつかりがねぞきこゆなる
　たが玉づさをかけてきつらむ(古今集)

なが月の時雨の雨の山霧の
　いぶせきわが胸誰れを見ばやまむ
　　(萬葉集)

また物のうたがはしく定かならぬ時には、多く「なに」といふ詞を用ふ。今は、俗語にはどれ、どつちなどいふ詞を用ふ。又文にはいづれ、いづらなどいふこともあり。

また、所のうたがはしく定かならぬに用ふるには、多く「いづく」、「いづこ」「いづれ」などいふ詞を用ふ。今は俗には「どこ」といふことを多く用ふ。

今は、まいて、何くにもいづくにも、さやうのすぢなど思ひたつべきにもあらずかし云々(更科日記)

夏の夜はまだよひながら明けぬるを
　雲のいづこに月やどるらむ(古今集)

世にしたがへば、身くるし。また、したがはねば、狂へるに似たり。いづれの所をしめ、いかなるわざをしてか、暫時もこの身をやどし、玉ゆらも心を慰むべき。(方丈記)

また、方角のうたがはしく定かならぬ時には、これに代ふるには、多く「いづかた」を用ふ。例へば

知らず、生れ死ぬる人、何方より來りて、いづかたへか去る、(方丈記)
の如し。今は俗語には、多く「どち」「どちら」などいふ語を用ふ。又、文には、「いづち」といふ詞をも用ふ。

五月雨にもの思ひ居れば時鳥
夜ふかく鳴きていづちゆくらむ(古今集)

又、時のうたがはしく定かならぬが代りに用ふるには、「いつ」といふ詞を、多く用ふ。

すがる鳴く秋の萩原朝たちて
旅ゆく人をいつとかまたむ(古今集)

斯の如く、取り出でゝいふ時は、區別あるなれど、今は其の區別、亂れてあきらかならぬ所あり。

動詞(わざことば)

動詞(わざことば)といふは、例へば見る、ゆく、の如き詞にて、事物の動作と有樣とをいひあらはす詞なり。

花咲く　蝶飛ぶ　鳥うたふ　人舞ふ

などいふ時の咲く、飛ぶ、うたふ、舞ふの如く、花、蝶、鳥、人の動作をあらはせる如き類をいふなり。有樣をいひあらはすとは、例へば、

庭に花あり　露玉に似たり

などいふ時のあり、似たりの如く、花露の有樣をいひあらはせる類をいふなり。動詞(わざことば)は、また用言とも作用言とも活語(はたらき詞)ともいふ。すべて意味は同じなり。

動詞の種類

動詞(わざことば)は、其の性質を以て區別する時は二種あり。即ち自動詞といひ他動詞といふものなり。他動詞を或は能動ともいふ。

自動詞といふは、其の物自身のみの動作にして、他の事物に及ぼさざる動作をあらはす詞にて、例へば、前

の咲く、飛ぶ、うたふ、舞ふの如き類、及び
人ゆく　馬はしる　水流る丶
の行く、はしる、流る丶の如き類にて、唯其の人、馬、
水の活きにとゞまりて他に及ばざるなり。
他動詞といふは、一事物の動作にして、且つ他の事物
に及ばせる動作をいひあらはす動詞なり。例へば、

花を見る　鶯をきく　敵を破る
城を取る　車をやる　馬を走らす
水をせく

の見る、きく、破る、取る、やる、走らす、せくなどいふ如
き類なり。咲く、見ゆ、ゆく、過ぐ、はしる、飛ぶ、舞ふ、
といへば、自動詞にて、咲かす、見る、ゆかす、過ごす、
飛ばす、舞はすといへば、他動詞なり。同じき動詞に
ても、例へば、

從は　從ひ　從ふ　從へ

といふやうに、語尾を變化せしむる時は自動詞となり、

從へ　從ふ　從ふる　從ふれ

といふやうに變化せしむる時は、他動詞となるなり。
此の語尾の變化といふ事に就きては、後に詳しくいは
む。

拜禮のかんがへ

故人　小中村清矩

拜禮は素と誠敬の眞意の表面に顯露する者にして、宇内の各國淳質の風を移すに從ひ、漸く簡より繁に入るは常なる中に、支那は古へより禮節の儀表を重んじたる國俗なるが故に、起伏拜禮の狀頗る繁縟を免れざりき。本邦の古へ聘問を彼國に通じ、政體制度を彼に倣ひしより、禮節も從て其風を移さゞるを得ず。此に於て起伏再拜の節あり。然れども只朝堂官衙の上にのみ行はれ、草莽間に至ては猶舊風たる跪坐の禮を墨守する事依然たり。故に朝政衰へ、柄權武家に歸してより、

終に漢風起伏の拜禮は、禁闕の式典と神官の祭典とに殘れるのみにて、朝野一般坐上跪伏の簡易禮を通儀として、近年に至れり。今其沿革の槪を少しく陳述せんとす。

拜禮するを古くヲロガムト云ひ、略してはヲガムとのみも云へり。釋日本紀に、公望私記に云、拜是乎禮加々無也、是可折屈身體、而敬禮也、とみえたるにて、語釋明らけし。今世俗にヲガムと云は、只掌を合す事と心得たるは佛法の拜より云へるひが事也。古き祝詞や萬葉集の歌に、鹿自物膝折伏とあるは、鹿の如く兩足を折屈むるを云ひ、鵜自物頸根突拔とあるは、鵜の屢々頸を水中に突入るゝ如く、首地に至るを云たる者にて、何れも敬禮の狀なれど、今世俗の兩手を突て、跪伏す拜禮は、上代のまゝに傳はりたる遺風と云べし。」さて古への人其誠敬の甚しきに至ては、一拜に止らず、跪伏ながら頭を低昂して、數度の拜ある可きは、自らの理なるにより。古事記穴穗宮（安康天皇）段に、四度拜八度拜の文あり。應神天皇の朝よりして、漢韓の民歸化せし者多く、推古天皇の朝、遣隋の使始りてより、漸く彼國風なる起伏再拜の禮行はれしかど、（日本紀允恭顯宗等の條に既く再拜の字面あるは例の飾辭ならん）推古天皇紀に、十二年秋九月改ニ朝禮一因以詔之曰、凡出ニ入宮門一以ニ兩手一押レ地兩脚跪之越レ梱則立行。とあるをみれど、未だ古禮を用ゐられし也。此れは神代紀一書に、彦火々出見尊海宮にして云々、於ニ中床一則據ニ其兩手とある遺風なるべけれど、古へ專ら手を據を敬としたりし事知らる。其朝廷に於て、立禮を用させ給ひし始詳ならざれども、天智天皇紀に、九年春正月、戊子、宣朝廷之禮儀、與行路之相避とあるまでに、正しき漢風の起伏禮を起され、續紀に文武天皇慶雲元年、正月、始停ニ百官跪伏之禮[illegible]

ぞ有べき。然れども、同四年十二月の詔に、往年有㆑詔停㆓跪伏之禮㆒今聞㆘内外廳前皆不㆓厳粛㆒進退无㆑禮陳答失㆑度云々、宜㆘自㆑今以後厳加㆓糺弾㆒革㆓其弊俗㆒使㆖靡㆓淳風㆒、とあるを見れば、上代より習ひ來し禮の止がたかりし也。官人等すら然れども、況て民間の拝は制も无くて過けん事思ふべし。爾後本朝の古禮なる數度を立禮に撮合して、嚴儀の禮典及び神拝などには、必両段再拝を用ゐらる。北山抄に本朝之風四度拝神、謂之両段再拝、とあるにて、此稱は再拝を両度する由なるを知る。類聚國史に、延暦十八年、春正月、丙午朔、皇帝御大極殿、受朝文武官、九品以上、蕃客等陪位、減四拝、爲㆓再拝㆒不㆓拍手㆒以㆑有㆓渤海國使㆒也、とあれど、此時猶常には四拝とみえたり。(禮容を減ぜられたるは、外國人の我國の禮に習はざるに因てならん)其後遂に四拝は止て、惣て再拝になれるを、只神拝にのみぞ後までも猶四拝は用ゐられける。

又伊勢両宮儀式帳、及び稲荷家の記録には、重き神拝の時、八度拝を用る事あり。且私には拝か一拝と称する軽易の略式もあり。

(編者いふ、この一篇は好古叢誌といふも、にのせたるを、なほひろく世の人に見せんとて、とりて、にのせつ。)

漫録

なみだ草（承前）

堀田璋左右寄贈

京極忠高女作

十七日には所の氏神へ、かどひでに詣でさせ奉り、さるべき所々にも御まかり申させなど、まぎはしき事ども過して、十八日には心のどかにれはしまさせて、髪

洗ひ御ゆひかせ奉り、けふむかりこそと思へど、御くしげづりにれひとめよろづの事を身づからかひしやくしたてまつりて、なでかしづけてそひ奉る。思ふ事をもとやかうやといわけなき御ありさまにいふべきならねど、めのとにとかくかたらひ聞かす。めのともとよりきたなげなきに、此君の御陰にて樣々の物玉ひ、使人もとめなどして、身をかへたるごとくになりいでけれども、老たる親稚なき娘などのこして、はま〳〵をも下らん事年月は心安くならひて、俄にやん事なくしらぬ人々の中にまじらひ、うひ〳〵しくやすからず有べきかな、と心もゆかで泣しをれけるを、かつはいひ慰め有べき事どもをしへなどして、日も暮けれどこよひむかりと思ふにも、名殘せんかたなくぞありける。日比はいとよく思のどめて、我身はとてもかくても、此君の御爲さへよからましかば、ととざまかうざせて思ひ慰めつるを、今夜と成ては越方行末何事も思

ねず、かきくらす心地して悲しなども中々やるかたなくぞ有ける。此君をふところにふせ奉り。はかなき親子のきねんかな、せめて八十とせあまりまで身にそふる事ならで、幼なき有樣を遙々と引はなれ、すゑのもとの雫のためしにておくれさきだつならひあらど、これぞ此世の親と子のかぎりの分れなるべき。父には死して離れ、母には生て別れなしく成玉ひても、まことの親の面影はいかで覺ね玉ふべき。あはれ悲きかな。此君を生れとしてこのかた、一日へんしも身をはなさず人のもたぬ子をもちたるやうに思ひて、きうか三ふくの暑き日は扇の風を招き泉の水を掬びても、猶涼しからん事を願ひ、厳冬そせつの寒き夜は褄を重ねて暖に、隙間の風を防ぎてもまた夜や寒きと心を盡し、晨起ては初花の開たるを見る心して、猶床夏の匂なづかしく、あけても暮ても此君をまつはして、身の憂をもわすれて、[illegible]

りてか慰めんと思へど、涙も所せく床も枕も浮くばかり、鳥と同じくなきあかす心の内の悲さは譬て云はんかたぞなき。千夜を一夜に重ねても長かれかしとは思へども、空しく其夜も明ぬれど御供の人々集りていとゞ物騒し。此君もいかゝればすにや今朝は例のやうにもれはしまさず、うち静まりまめだちておはしませど、いかにおぼすといとはしくて誰も〳〵鼻すゝりがちに、いやめなるを見たまはゞうちなきなどもし給はんにぞかつはいま〳〵しと制し止めて、身づからもせちに思ひねんじつゝ御心につくべき事など云なくさめまぎらはして、けさの御まうけくみ奉り御かはらけ取かはしなどして祝奉る。日もたけければ旅の御装束着せ奉り、髪かきなでゝ心静かにかいしやくしたてまつりて、御父君の御方まで出し奉る。佐々九郎兵衛のせうあはれしのぞぬ人にてかゝるわりなき心の内を推量り給ふにや、なにか苦しかるべき、近き所までうち送り給ひて道行ぶりを見給へかしとの給へど、いと嬉しくて急ぎまうでつゝ片山といふ所に待見奉る。道のほど萬のさはふ日比御父君の下り給ふぎしきにもやゝうちまさりて、道々清め眞砂を布き、所にある人々は高も賤きも我劣らじと御送りに出給ふ。名字をも人に知られ、なをもかぞへらるゝほどの人は、一人ものこらず、其外町人いけさい〳〵の庄屋まどころまでも、我も〳〵と罷り出でゝひますきまもなくなみ居つゝまはりわけて拜み奉る。かうやうにうつくしくめでたき御ありさまを見るには、れもたゞしく嬉くて思ひよらずかゝる此幸も日比たのみ奉る佛神の御憐にありけん。なにのたけきこととありて自からあながちにわりなくをしみ奉るもわれながら惡き心にかし。余りにふくつけき事は神も惡しとればしなんと思ふにも、こよなう力いてきて此程の思ひしづみし胸も明きぬる心地す。君うち出給へど御たうぐともきよしをろろへ、

御供の人々に御あとさき右左ぎやうぎ正しくうち靜まりて歩ませ給ふ。ほど近く成給へど乘物さしよせて御暇乞し奉る。今まで萬慰みし心もいつしか失せはてて、目もくれ心も消るを、今一度と去はりあげて見奉る。此君もいと名殘惜げにてなみだを一目うけながらなきなどもし給はず。さすがにはゝゑみてれはす。物きこゑなどすれど例のやうに御いらへもし給はず、かなつきてれはしますを、めのとうたてと思ひていろがし出れど、心にもあらずひき別れ奉る名殘悲しともいはんかたなし。人めもしらず聲も立てつべし。御うしろのかくるゝまで見送りて泣より外の事なし。かの松ら佐用姫がもろこし舟を慕ひかねて、ひれふしけん古へも今さら思ひやられて涙と共にかへりきぬ。親しき人々集り給ひて、さまぐ\に慰め給へどもいとらうたげなるかはぜせにて、うち涙ぐみ名殘惜げに見れこせ給ひし面影の身て[illegible]

くぞありける。いでいり遊び給ひしつま戸のあたり殘し置給ひし遊のてうど、ぬぎ置給へる御ろみるにつけても涙の種と成て、わきかへる心地ぞする。かつはいまはしきのみなげかじと見れども心にも從はず。涙より外にかこつかたなかりける。日暮けれど夜のれましにふしぬれども、床のあたり物寂しく有し夜の悲しさは中々物數ならず、胸せきあぐる心地して、長き夜すがらいとゞしく夢みる程もまどろまず。夜明けぬれども猶あきれたる心地して、いかにせんとまどはれつゝ、たけとりのかぐや姫雲のはたてにのぼりにし宮つこまろか別れまで、我身の上の心地して思ひ殘せるかたもなし。霜枯の前栽を眺むれど此君のてすさしに植れき給ひし小松ねざゝ、ちひさき草木どもの、あをやかにていくしもあるを、今は形見ぞかしと思ふにも、植給ひし面影のよひし事どものまづ思ひ出られて、涙のも[illegible]

る御名殘はよその袖さへなくさめがたうさぶらへど、ましていかにと思にも御ことわりにはさふらへども、今ひくほどかはんべるべき、おとなしくならせ給はしめて前思ふやうにて上らせ給らん、その程は御身を平かに念じ給ひて對面をこそ待奉りたまはめ。且はいまはしき事なりと、なくさめ教訓し給ふ。さることゝは思ひながらとふにつらさの涙は今日こそまさりてなん。

をくるまのめぐりわふせもたのまれず
　我が玉のをのかぎりしらねど
心行たびのわかれと思へども
　つゝみかぬるは涙なりけり

（未完）

淺瀨のしるべ（承前）

牛はうしづれ

故人　藤井高尙

ものうらやみするは、人めも見ぐるしく、さるこゝろにてはたらはぬことをなげくあまりに、おのづからあしきわざどもしいづるぞかし。老ぬる人はおいぬるどち、まづしき人はまづしきどち、いひあはせて、あそびをもなにをもしきたらんこそこゝろやすくてよからめ。たとへば春の花見るに、とめる人どちは木かげにあたらしきかもしき、さかなところせきまでおきならべ、あそびにさみせんのことひかせなどしたるは、たのしげに見ゆれど、その中にまじりてはおもひのほかにをかしからぬふしも、とほくまづしき人どちは、袖のなかよりかれいひとりいでゝ、かたみにくふはわびしげなれど、いさゝかなるひさごの酒のみかはせど、こゝろゆくものにて、いと／＼おもしろかるべし。

かちてかぶとの緒をしめよ

何事もなさんとするをりには、ふかくおもひめぐらし、心とゞめてものするからに、あやまりすくなきを、なしえたるときにこゝろゆるびて、あやまるものなれど、さるこゝろしたらんぞげによろしかるべき。やまひのおこたりざまなるをり、今はなでふことかあらん、とおもひかろしめて、ゆあみくしけづりなどしては、たちかへりにはかにおもる事もあるごとく、がくもんなども人にまけじとつとめまなぶほどは、そのまなびやうもものしり人にしたがひて、とひきゝつゝものすれど、あしからざるを、やうやう人にもちひらるゝきはになりぬれど、かくてたりぬとおもふこゝろより、おこたりもし、心おごりもして、ひがことゞもをわれかしこげにいひちらすたぐひも、世にあることぞかし。

いくさを見て箭をはぐ

よろづのこと、そのをりにさしあたりてなすには、なしえがたきすぢ、たらはぬことゞもありて、かねてしおかざりしことをくちをしうくやしうおもふものぞ。こゝろがまへかしこくて、にはかなるにもさわがず、まどはぬ人のしわざにても、なほうちあはず見ぐるしきふしのかならずあるものにしあれど、かたへの人はおもひもかけぬをり、あるはやうなきすさみなりと見るばかり、かねてよりはやくなしおきて、さしあたりてはふくろのなかのものとりいでゝ、人に見するやうにぞせまほしき、をさまれる世にもみだれたらんときのことわすれぬこゝろばへもおなじ。がくもんもさやうにてものゝ例などひき出んとて、にはかにさがしもとむとては、ふるき書のこゝかしことたづねまどひ、もとめえずしてやみなどするを、はやくよりこゝろえて、何となく書よむをりにも、これはかれはと、めとまるふしぶしつましるししおけど、考へすることも

たやすきなり。

なま兵法大きずのもと

手かくことはみゝずがきにても、むげにかゝずらんよりよけれど、わだしわざはなま〳〵になしたらんよりは、せざらんかたのまされるもれはかりけり。世の人の言種によき鷹はつめをかくすといふごとく、さねもなにもすぐれたる人は、こと〳〵しくいひたてず、いまだしき輩ぞわづかにしれることをこと〴〵く人に志らせまほしがりて、とものまとゐにもひゞらぎゐて、うべ〳〵しくいひまはすなるを、みな人はなのわたりをこめきてきくふしれはかりけり。

かりぎよりわらひぎ

つれ〴〵ぐさといふ冊子に、手のわろき人のはゞからず文かきちらすは、よし見ぐるしとて、人にかゝするはうるさし、といへるはげにさる事にて何ごとのうへにも、れもひわたすべし。

いろがむなのはれ

なにゝてもはやくなさんとれもふことは、しづかにてゝろとゞめて、すこしいとまいるともものゝくま〴〵まで、よくれもひめぐらしてなすべし。志かせねばさはりありて、はやくなしゑぬものになん。ものかゝんとするにも、いろぐをりには志づかにてゝろとゞめてものすべし。さるはもじをかきろんじもし、れとしもしては、ろれをとかくつくろひなし、またはかきあらためなどするほどに、いとまいりてなか〳〵にれろくなるものなれどなり。

善はいろげ惡はのべよ

志はすの言種にこんとしよりはものまなびにてゝろいるべし、といふ人のよくつとむるはなし。されどなにてもよきことゝ思はんことは　れもひよらんすなはちよりいろぎてなすべし。とゞこほりすゝまぬ、何のたけきことかはあらん。れこたりて月日をふるうち

に、わりなきさはりのいできて、おもひながらねせぬことあるならひぞかし。又よからぬ事なりと思ふことは、いかにもよく考へ思ひはかりて、日を經月をわたりても、いそがざるぞよき。わがためにも人のためにもよからぬ事は、しかためらふほどにつひになしねずてもあるべきなり。なさでよかりつるよと後におもひしることも世にはおほかるならひぞかし。

おごりものひさしからず

時にあひ、はなやかにおもふ事なき人の、あいなう大かたの世にそねまるゝもしらず、こゝろのかぎりおごりて、よろづに思ひやりふかゝらぬは、そのをりこそさてもあるべけれ。おほくの人のうらみをおへで、神もにくみたまひて、久しくはさかえじ。ときうつりおとろふる末には、かたがたおもひつめたることのむくいせんとする人のありて、人わろきことゝも、出きぬ

りみがき、てうどなどもめづらしきをもとめ、身にはよきゝぬの世にことなるをき、あるはあそびをよびとりて、今やうの琴ひかせなどはかなきすさびに心をやりて、過すほどは、たのしからめど、もたるこがねはかぎりありて、さおもひのまゝになしたらんには、つひざらめやは、まづしくなりても、よかりし昔の心かへがたくて、せんかたなきものにぞありける。されどこゝろはさらにもいはず、身のよそひもなにもおごらざらんこそよけれ。　（未完）

おきの玉藻（九）

永石德文

兄弟のあひだがら

兄は弟をあはれみ、弟は兄にしたがふべし。骨肉同胞

也、伯夷叔齊は孤竹國の君の子也。父つねに弟の叔齊にあとをつがせんと仰ける。父なくなり給ひて後、弟は兄にゆづりて位につかず、兄は父の仰なればとて、叔齊にゆづり、兄弟共に位につかず、その所をにげ出けり。又後漢の世に、趙禮趙高は兄弟たがひに命にかはらん、と義を立し故、賊の難をのがれたり。當世の人は貪欲無道にして、兄弟をかすめて親のゆづりを我ばかりとらんとし、弟はうばはんとする故、不和となる事有て、たがひにあたをふくみ、他人におとる兄弟世におほきなり。せめて一人すぐならば、事は有べからず、兄弟の不和はみな、欲ゆゑなり。弟愚癡なり共、兄欲にはなれてあはれまば、弟もそむく事有べからず、舜の弟に象といふ者あり、大欲にして舜をにくみ、度々ころさんとしけれども、少もうらみずしてよくあはれみ、象よろこべは共に悦び、象うれふれどもともにうれひて、つひに有痺といふ所の主となされ、安樂にして置給へり。兄はすぐなれども、弟大欲にして、兄をにくみ親をうらみて、あだをめくむやからあり、かやうの惡逆成者はやがて其身ほろぶべし。道理をしらぬ者は禽獸にもおとれり。螻蟻の君臣鴻雁の兄弟あり、羊はひざまついて乳をのみ、老狐はつかをあとにせぬ禮あり、不義なる人をば孔子も人の面けだもの、心とのたまへり。　(子孫寶草)

兄弟のあらそひは、犬もくはずといへり

長老はうやまふべし

年寄をば他人なりともうやまひいたはる法也。しかるに諸人老人をみてはいやしみわらひないがしろにするもの也。老ぬれば淺ましきかたちをうる事、間もなく來るものなれば、人の上と思ひて必笑ふ事なかれ。　(同上)

良藥は口ににがし

良藥は口に苦けれども、病に用ひて利あり。忠言は耳にさかふものなれ共、身の行ひに德あり。人の諫言をば心をとめて聞べし。いさめをいふはぜなはまがるもの有。是は下等の人也。人の諫をよく用て、身持をなはすをかしこき人とすべし。親にても不義なる事あらば諫言を加へてとゞむべし。家に諫子なければその家必ず亡ぶといへり、恐ていはざるは誠の道にあらず。

（同上）

欲をつゝしむべし

欲をばほしいまゝにすべからず。よくをさかんにすれば必ずあやまちあり。たのしみをばきはむる事なかれ、たのしみ極ては必ずうれひおこるもの也。欲はおごりよりおこり、わざはひは貧家よりおこり、火難

女子のしつけかた

女子にははしり遊ぶことをいましめて、手習はせ書のはしをもよますべし。幼少より髮をみづから結びならはせ、扨把鍼をいたしならはすべし。事はげしき時は家女をたのみにして何となるべきや。左樣のときは亂髮にては見ぐるしく、ふがいしやうに相見ゆ、物縫ふこと達者ならば、何樣のやぶれ損したる所もすみやかに繕ふこと、此義猶又第一なり。幼きうちによく敎ふるを要とすべし。成長してはをしへを守らぬものなり。たとへば木のまがりたるがふとく成てはなはらざるがごとし。子をあはれまば杖をあたへ、子をにくゝおもはゞ食にあかすべし。

（同上）

愚者は少も富る時は、たちまち貧成者をわらひ、少も
藝能つきぬれば、無藝成者をわらひ、少しも位あがり
ぬれば、俄にひくきをいやしむもの也。

常のこゝろかげ

少しの物をも置所をつねに定めて用の時たづねぬ様にすべし。又我心ひとつにすまぬ事をば人に聞あはすべし。人のいふ多分につけば、失なきもの也。我思ふ通りをたてんとあらそふべからず。

さとき人も我身にはひいき有てあしきをばしらぬ也。人をいふ心を以て、我身をせめ、我身にひゐき有心を以て人を見べき也。

米穀と衣服は誠の國の寶也。一粒をくふ時も農夫の年中のくるしみを思ふべし。一縷を着る時も織女の辛勞を感ずべし。耕作する者なくば食を得る事なし、世間の人たがひに恩有といふ事は、皆人それ〲のわざ有てつとめ、たがひにあひたすくるゆゑ、互ひに恩の來生也。わが家職を第一につとむる人は、人の恩を報ずる也。

（同上）

清少納言　石榑千亦

吾琴平にありし頃。社のもとに清原のおもとの碑あるを見て思へらく、才彼の如く學彼の如くにして、なほ都にもあり得ず、老駿馬五百金にだに召されずして、遠き島根にさすらひ、駑馬にも劣れりとうたはれけむは、その行によりてなるべしと、ありし昔をおもひやりて、袂を沾すを知らざりき。されどおもへば、そは例の生わかき思ひなりき。おもとは中々にかゝる涙を口をしと地下に嘆きしならむ。

あはれ枕草紙は、おもとを見る眞澄鏡なるべし、其筆づかひは、あるは花あり、あるは實あり、こまやか

なるがあれど、つゞまやかなるがあり、正しく打つけにしるせるがあれど、おはまはしに横さまよりうつせるがあり、論に、評に、思ふまゝならぬなし。されど優に長きよりは、簡に短きがまされり、寸鐵人を殺すといふきはなるべし。おもとが心のはたらきも、やがてこの類ならじやは、されど千歳の下、其文を見れど、其人面かげにたつが如き心地す。

おもとはすぐれたる庭の敎に生たち、和漢の學にいたりふかゝりしにより、中宮定子の君にめでられ、後宮をして爲に光あらしめつ、されどかりそめの筆のすさびも、學なきものにはさとる事難く、あらず其交はる處は、多く當世の才學ある官人にして、中々にそれらをして、舌を卷かせつることもありき。今様の詞をかりていはゞ、文學者としての清少納言は、よし數多の文字を殘さゞりしにもせよ、殘せる處は皆金玉にして、誠に間然するものなし。よし女子の[illegible]ては、[illegible]さはしからすといはゞいへ、男子だに其右に出るものあらざるをや。

おもとは知遇の恩を蒙れる中宮の爲には、其身心をなげうちてをしまざりき。されど其中宮に盡さむとする心は、ますら武男が仇にむかひて、一歩も退くことなく、額に痛手はおはゞおへ、背は見せじの慨あり。中宮が天皇に寵ありしは、其本づく所たゞこの眞心よりひきて及べりといふも憚あらじ、ないひそおもとは其心根の女らしからず、好配をもとめざりしによりて、身の置處なく、しらぬ野山の草の上の露ときえにきと、こは其忠義心にかられて、わが身を顧る遑あらざりしによりてぞかし。されど中宮の盛ゐましゝほどは、おもとも衰へず、おもとの盛を失ひしは、やがて中宮の衰へましゝによりてなり。中宮のはらからにして、やがて中宮の盾ともなり、矛ともなりし伊周公は、[illegible]

敗又失敗は、ひきて中宮の上に及び、遂に天皇の寵を失ひ、やがてこの世を去りましゝより、おもとは世をあぢきなきものに思ひなし、ながらへむとだに思はずなりにけむ。思ひをくだきし中宮は、はやく其かひあらずなりぬ。さるをいかでおもとの心には、其よき墓所をもとむる心あらめやは。よし其結果いかなりしにもせよ、補佐としての清少納言は、又至れり盡せりといひつべからむ。

おもとが普通の女子としての境遇は、朝廷を去りてより後のことなり。されど其をりを女子としての、清少納言の時代ともいひつべきなり。されど失望の余、世をはかなくあぢきなく思へるおもとによりては、普通の式によりて律すべきにあらず、さらでもおもひの儘にふるまへりしおもとは、この後いよゝ慕りゆきて、天地を家とし、至る所皆わが身を埋めむ墓所として、中々にかゝつらひなきを、おもしろしと思ひしならむ。されど普通の女子の目より見れば、女らしからぬことのみ多くなりゆきつるならむ。故に女子としては、學ぶべからざること多かり、是はた已むを得ざることなるべし、かゝれどしらぬ鄙路にさすらへありき、遂に遠き境に身をかくして、人にしられぬを中々にうれしきことゝ思へりしなるべし。碑などたてゝ事々しくいひ傳へらるゝをぞ、中々に心うきことゝ思へりしなるべし。ましてわが生わかき思ひより、涙などそゝぎつるをや。さるにてもあたれりや。いかに。地下の靈、それ物いはゞとひてましを、きゝてましを。

小杉榲村評　いと〳〵卓見。まづはじめてよみ見て案を拍ち、ふたゝびよみて拳を握り、三たびよみて榮花枕草紙に其徴をおぼゆ。されど琴平山の墳墓は吾阿波國のさとのあまの墳墓の類ならめど、いはゆる章段の脚色にして、おそらく君がこの文によりて、琴平山の墳墓を實蹟となさむことをあ

なかしこ。

佐々木信綱評　文學の上より多く見ずして、其出處進退を論じたる、一種の觀察なるべし。されど琴平にあるが、果してまことのれくつきなりや、いかに。

月夜に釜をぬく

たけを

こははやく第百二號に掲ぐべかりしをとやかくといろがはしきにとり紛れて今日まで後るゝことゝなりぬ。今となりては何となく間のぬけたる心地すれど、さりとて結をつけでやまむもくちをしければ、またこゝに掲ぐることゝなしつ。

靜に口を開きたる友は、ろも何事をか說き出すらむ、と皆々口をつぐみて耳をろだつれど、ぬくとぬかるとの議論はれとかしけれど、このけちめは今更云ふにも及はじ。さてこの諺よ。われも能くは其の意を知らず。されど聞きさしたること無きにあらず。月夜のこと釜のことは既に云はれたる如くなるがこは全く人目にかゝりやすくて忍ぶにたよりあしき月夜に最厚くも忍び入りて、釜をぬき取る意にて、すなはちよにいふれたしの強きことを譬へたるものなりと聞けり。こも一理ある說ならずや。

と云ひ出せど、さなり〳〵、ろれに疑あらじ。ろれぞ確に動くまじき說なるべきと人々さわぐ。我もまたげにとうなづく中にひとり去ぶき顏して腕こまぬくはかかのぬかる論者あり。

君は猶ひとりぬかるの本城にたてこもりてあくまで鉾を交へむ覺悟にや。

と一人が云へどまた一人が、

月夜に釜をぬかぬくとは君の事よ。あはれぬかるの本城

ははやぬかれぬ。はや旗を巻き兜をぬぎて降り給へ。
とあざわらふ。ぬかるの城主はいとおちつき顔に、
さな云ひそ。われもとよりみだりに戰を好むものにあらず。さりとてまたみだりに旗を巻き兜をぬぎて降るものにあらず。今の説一わたりは聞えたるやうなれど猶よにこの諺を用うる場合を見給へ。我が田へ水引くこゝろにあらねど、よにこの諺の用ゐらるるは大概油斷を譬ふる場合にあらじか。されど今とやかく云ふとも所謂水掛論におち入りぬべし。われは猶よくたしかに取たゞして再君たちと戰場に見ゆることあるべし。それまではわがぬかるの城よしよわくとも、たやすく君たちにあけ渡すまじ。
と云ふ。
こは面白し、けなげなり。ゆめ月夜に釜をぬかれ給ふな。ぬかるの城をたのみてぬかり給ふな。
など人々のの〻しる折から打出す時計の數は十まり二つ。
こはぬかりたり。思はぬことにあたら時を過しつ。いざまからむ。
とて人々のたちあがるにいとのこりをしけれど、さのみはとて其のまゝたちわかれき。
あはれこの諺はいかなる意なるらむ、至極の油斷を戒めたるものにや。またおしの強きことを譬へたるにや。さらずば他にことなる意あるにや。こは殊更にとりたてゝ云ふべき程の事にもあらねど常によく聞き馴れたることの其の意解けず、いと口惜さまゝこゝに掲げて世のものしり人にたつねまつるになむ。

男女の合性

龜井白菊子

夫れ嫁娶のことは、人生の最も大切なることにて、一身の幸福も一家の繁榮も、一國の富强も皆之れに基す

るものなれど、嫁娶のことは愼重に愼重を加ふべきは、言を待たずといへども、世には往々其たゞすべき血統遺傳のこと、躰格の良否などには意も留めずして、却りて必要もなき合性のことなど、彼是と氣にする人の多けれど、そは大なる心得違ひにて、合性など云ふことは、少も意と べきものにあらず。唯々其人の心の用ゐ方一つにて、好き合性ともなり、惡しき合性ともなるものぞかし。已れこの頃、徒然のあまり、古き書物など、それこれと見つる中に、左の一節を見出しつれど、世のあやしの書物を迷信して、折角なれど合性惡し、今年は申年なれど、嫁娶のことは見合せんなど、ゐもあらぬことに心を傷め給ふ人々の爲めにとて貴重なる女鑑の余白を借りて、示しまゐらするになん。

右大將賴朝は久安三丁卯年、十月に生れたる人にして、三世相とか云へる書物に照らせば、燈籠の火の水の性なり。男火女水大にわろし、子なし。あれども短命なりと、果して賴家二十三才、實朝二十八才、大姫君十四才にして短命なりき。また足利尊氏は嘉元三乙巳年の生れにて、賴朝と同じく、燈籠の火性、夫人某（赤橋相模守盛時の女）は德治元丙午年の出生にて、天河の水性なり。是れ亦男火女水にて大凶なれども、子孫長久して大に繁昌したること、賴朝とは雲泥差違あり。されど三世相など云ふものは、決して拘泥すべきものにあらず云々

と封建時代に書き遺したる人あり

さくらのたぐひ

住山幾子

彼岸櫻　これは普通に唱ふる名なれども、小櫻といふが本名なり。小白の單辨にして、他の櫻に先ちてさ

熊谷櫻　彼岸の八重をいふ。花瓣小さくして、色赤し。
婆櫻　彼岸と同じけれども、葉のなきものをいふ。
絲櫻　花は彼岸に似て、枝は柳枝の如く、下垂れたるものなり。案ずるにしだれ櫻の事ならん。

山櫻　山中に多し。單辦にして色白く、早く開くものを山櫻といへど、山櫻の中には、其種類多し。花に紅白の二種ありて、着花疎密大小の別もあり。單辦小輪にして色白く、花の疎なるものを兒櫻といひて、單辦にて、五辦あり。色白くして中輪なるを殿櫻といひ、花の密なるを吉野櫻といふ。

桐谷櫻　一名を車返しといふ。一枝の中にて八重と單辦と交りて咲く、しかし其中にも八重多くして單辦少なく、花の色薄し。

江戸櫻　桐谷に似たれども、皆八重なり。軸ながくして埀れ、色濃くしてかさねの辦うすし。盛りすぐといへども、散らずして枝に凋みつくなり。

芝山櫻　一名鷲尾といふ。單辦大輪白色にして、即桐谷の單辦なるものなり。

有明櫻　白色にして單辦もあれど、また八重もあり。江戸櫻に比ぶれど、少しく赤みあり。

絲括櫻　千瓣八輪。一處に二三十の花集り、球の如くになりてさく。故にまた手球櫻ともいふ。色うす赤く、花瓣大なり。但色白くして、絲頭に攅りたる此手球の垂絲れたるものを、大提燈といふ。

緋櫻　千瓣小輪。莖ながく、下垂れ、未た咲かぬときは紅く、開けど色淡紅にして、よく紫蘭に似たるものをいふ。而して稍花小く薄紫小菊を見る如く、蕾の内にひらけど、白く紅暈なるものを揚貴妃と云ふ。

淺黄櫻　單辦にして色白く、蕚は綠色にして、桐谷と同じ時分に咲くを例とす。然るに花は黄なるもの丶如く見ゆれど、是れその蕚に映つりてかく見ゆるな

り。

黄櫻　千瓣大輪にして、茶色なり。

御所櫻　千瓣にして、五花一所にあつまりて咲く、故に五所櫻ともいふ。大輪大瓣にして、甚だ美し。

香櫻　千瓣紅色、香氣あり。小輪にして花疎なり。

犬櫻　一名を南殿櫻といふ。又上溝ともいふ。花簇生穗をなす。其實熟するに至りて、黄色なり。好事者鹽漬として食す。

伊勢櫻　八重深く紫赤にして、花瓣の本は白し。

鹽竈櫻　八重にて、花と葉と雜りて出づるもの。

法輪寺櫻　小瓣小輪重ねて厚し。普賢像、花一處に集り莖長く垂れ、色赤く、花莖僅に一つ二つ青芽二つ三つ花瓣の間にましり出づ。

花見

草の屋主人

花は櫻、櫻ざかりおもしろきはなし。ほの〴〵と朝日ににほふ山櫻の大和心といふなるかをりは、げに、心よりゆかしきもの丶限りなれど、照りもせず曇りもはてぬ春の夜に、おぼろにはひたるけぶりは、げにしくものもなくぞおぼゆる。

それをはじめて、いざよふ夕日にうつろふ八重櫻の錦なす色は、かなしき妹や子にきせても見まほしく、青柳のいと靜かにうちかすむ雨に沾へる庭櫻の雫には、われながら濡れても見まほしきより、雲とか丶る遠山の櫻、霞となびく野邊の花のはてなきけしき、松杉などの常葉がくれにすきて見ゆたる、谷川浦わの浪ちかく咲き亂れたるてどのいふかたもなき風情まで、とりどりに、花ざかり、おもしろきものはあらじ、月より



都の名所には、まづ、上野山。あけつぐる東叡山の鐘の音も白う響きて、露にうるほふ花の、朝風にはひこぼれたるけしきは、ねもいへず。山ながら紅になびく飛鳥の山の花は、うら〳〵とかすむ田面のながめさへそへて、目もあやなり。

岸ゆく水もよどむばかりに咲きつゞきたる隅田堤の花は、さながら花の畫襖たてつらねたる如く、わけゆけど、われも人も、畫中の人の心地こそすれ。

やゝ遠く小金井の櫻、はる〴〵と咲きつゞきたる末は、何處の山の霞ならむ、目もはるなるに、玉と浪よる清き瀬の水に、雪とばかりちりかゝるけしき、月ならねど、心すみゆく思ひぞする。

都わたりにはあらねど、みよし野のよし野山、峰も尾も各々、ほの〴〵にほふ花のあしたは、げにうちわたす心も、花に成りぬべくればね、嵐の山の夕あらし、

けしきなれど、志賀の山越、むかしながらの花もなほありといふ。

いざ、孃たち。ゆきたまへ。花といへど、何處もれもしろし。ゆきて花にうたへ。うたひて君がうつくしき御代をことほげや。いざ孃たち。いざゆかむ。

淺草公園

塲井ふく子

ふり分けの頃より、淺草は人の雜沓する處うるさしなど云ひて、父母のつれ行かんとの玉ふも、妾はゆかじ、待ちてよ。人形も欲しからず、鳩も天王のみやしろにあり、見まくもほしからずとて、いつも祖母なる人わづらはしたてまつりて留守番しけるに、すねものゝとて、笑はれし事多かりき。されど、祖母なる人は、自らをいとかなしがりて、起き臥しに傍をはなさせ給は

行き給ひぬ。妾が人より價かろきは、かゝりける故にやなど思ふも物體なし。此の一年二年は、はかなき事のみ身にしみて、いやこもりがちになりまさり、ゆかりわる人の許にだに、まれにもれとづれず、たゞく學びの道をたどりわづらふなかりなりけり。

さるに、先きつ日、姉の子たちが試驗休みなりとて來り、淺草へつれ行き給ひてとて母に請ふに、汝も行かずやとむけ給ひしかど、よき程にこしらへ逃れんとせしに、汝行かずなどしぶらせ給ひて、姪等のはひまつはるに、流石にふりきらんも心なければ、さらばとて四月一日晝すぎより女子どもかりうちろろひて行く事となりぬ。ひとり妹のたれこめて殘りしに、自らが代らまほしき心地しぬ。

幼き者もをれど、車夫をやつれ行かんと云ふに、あなけしからぬ事をの給ふものかな。日來學びの庭のゆきかひに、何處の華族の姫にや、いかなる貴族の令孃に

や、車にうちのりて、老たるものを傍へよけさせ、幼きものをかきはらひなどするを見る毎に、いと淺ましう思ふものを、我等の身分、まして遊びに行にと云へた、姪なるもの、姉なる方、已れ先きつ日赤坂より上野まで教の師につれられて、ゆき歸りともにありきたりと云ふに、七歳になりたる妹の方も、妾もありくがよしと云ふ。いとけなげなり。よくも云ひにけるよ、さりてころ田舍もの、姪よなどとうち笑ひて、小石川なるむぐらが門を立ち出でぬ。

さて本郷より池の端に出でしに、厂の五つら六つら殘り居りたるに、

玉敷のみやこの春にかへり路を
わすれやしけん殘るかりがね

と口ずさみつゝ、上野を見亘しゝに、やがてこぼれ出でんとする蕾の花の、ゆかしう、なつかしう、何となく吹く風もかぐはしき心地しぬ。登らんかと云へど、

上野は先きつ日くまなく見たりとは、淺草にいろがんとする心にや、童心のいとをかしさよ。やがて、廣小路に出で、鐵道馬車にうちのりたり。便りよき方には、とかくにひかるゝものかな。僅のほど乘りたるなれど、何となう胸あしうなりたる身の腑甲斐なさ。人に知られまじと袖に包みしかど、遂にくるしさの顔にもあらはれにけん。人にとはるゝも、げに世に後れたる身の我ながら恥かしかりき。馬車淺草につくや、いろぎ飛び下りたりしかど、胸のあしさはなほやまず。されど、つゝみ〳〵て名にしあふ觀音堂に登る。やがてまた堂をも下りて、奥山の方へ廻り凌雲閣と云ふものは外より見つ。さて、見せ物のつらなる方へと出で行きぬ。地獄極樂の人形、日清戰爭などかずある見せ物の中にも、球のりとかの見せ物のいとにぎはしく、見物人も、數多あるものから、子供等に見せんとて入

て、上りて見れど、五十にも近きめで度男、これや此仲間のかしらならん。紅きづぼん、まんてるとか云ふ上着を着し、ひげなどひねりて、ゐたり貌に口上など云ひぬれど、三十ばかりの何れも壯年の男子三人四人、めのまはり、頰のあたりに、白き粉など輪に角にぬりなどせり。支那人のまねにや、又は、れしのまねにや、さま〴〵の手つきして、飛びつ、はねつするれろからしさ、見るもいまはし。また廿歳前後なる學び盛の少年ども五六人、音樂のまねして吹きちらしたる、もし孔子の聞かれもせば如何なる夷狄の樂とや思ばさん、見きゝたる妾もはづかしかりき。さは云へ、今日のみはゆるし給へなど云ひて見てあるに、我子にや、他人の子にや、十二三なる童子を江川某と、某なども二人の名を得意がはに呼びたて、綱のりの藝とて、幾丈かあらんと思ふ高き處に、のぼせつ、下ろしつ、足の

ら猿が木の上にてたはむるゝ如くなるを、笑ひどよみ、ほめそやす見物人の心もあさまし。はては、風車或は、水車とて、一人の子の足にて、他の一人の子のくびを廻はしたる見る目もあやふし。一同思はず手をうちならし、どつとほめたてたる聲、天地もくづれんと思ふばかり、何のほむべき事やはある。さらぬだに心地あしき身の、稠人の中に、此のやうなる目めはるわざを見たれど、心地いやあしくなりしかど、子供等の興さまさんも流石と思ひ、忍びに忍びしに、やがて其の藝もすみぬ。さて、此度は七八人の大人子供等の中に肉色のしやつ、肉色のさるもゝひきをつけたる十四ばかりの女子のうちまじりて、諸共にくるひつゝ、廻りつゝ、はては、頭を床につけてころげかへり、己れが第一と云はぬばかりに、鼻に指をさして、ほこりたる、見ぐるしとも見ぐるし。ます〳〵あさましく思ふまゝ、心地もいよ〳〵わろくなりぬ。かゝる處に、もし、倒れ

そばにてなど、はづかはしと思ひ、妾は池の邊り廻りてん、ゆるし給ひねとて、ひとり外の方へ出でんとするに、顔の色の常になく青かりしに、母なる人のきづかひて、諸共に出でん、もはや歸らんなどの給ふを、たまさかにつれ來にたる子供等の、興をなさまし給ひそ、さのみあしきにはあらず、池の金魚を見まく思へばなりなど云へば、母なる人もうたがひはなほ深きやうなりしかど、さらばとてひとり出し給ひぬ。此の見世物のまくの外がはには、十四五ばかりなる花の少女ともに、紅き青き衣をきせ、袴をはかせなどして、ならび立たせたる、そも五體そろひたる子を、此のやうなるはづかしき處にさらさす父母は、そも如何なる親にか。此の子羊の顔も犬のからだもなし居らぬに、さても〳〵あはれむべき子や、生れもつかで、獣類の子の數にかずまへらるゝよなど思ふに、いよ〳〵我が父母のなさけのありがたさ身にしみて、池の垣根によりか

かり、涙にしづむ折りしも、母なる人の心すまでや、人々をもよほして出で來給ひたる、幼きものまでが、妾が顔を守りて歸らんと云ふ。さても、如何なる顔をかなし居りしならん、思はず心をいためまつりし罪の深さ。心地はよくなりぬなど云ひて、池のまはりをありき、さてまた、觀音堂の前に出で、鳩に豆を與ふるに、此處の鳩のなれたる事は、ふまんと思へどふまれんどかりなれど、誰一人きずつけんとする者もなし。食は餘りにあまりて、ろこにも、此處にも、ひろひ殘したる、さても幸なる鳥かなと見る人もあらんが、木より木に飛び移る樂みは、また大ならん。此處等のものは人も鳥もみな己れの性を忘れたるはなど思ふも自らがひが心にか。はしきものは何ぞと幼きものにとへど、人形よと何れも云ふに、よき程のをとりて與へしに、心もすみにしにや。外のものなどをも見ず、

供にならまほしや。

さて吾妻橋のほとりなる、ある料理屋に上りて、ゑむしいこひしに、嫂なる人の我が顔をのぞきて、うれしや、始めて日來のふく子ぬしの紅き貌になり給ひし。さりてぞやう〳〵妾が心もおちゐたりなど〻云はる〻難有さ、數ならぬ身を、さどかりに思ぼしてなるか、いとうれし。さて、仕度もと〻のへたるに、夕つ方と云ひ、子供もつかれにたるさまなれど、此度は爭はず、車にうちのりて歸りぬ。

野寺の墓

石榑清菅

（り）

金一をこの家に殘しれくには、いかにもして兩親になづかするより他はなし、いかに心なき方にても、かは

つ、すゞやかなる目して、爺さま婆さまとしたひよるを、などつれなくはあつかはれむ、それよし〳〵、これより外に欲はあらじ、わが夫も今はおもしろき事もなしとすゝまぬものから、さしたる仕事も手につけず、世をうみはてゝゐ給ふゆゑに、さぞ何かにつけてもままならぬことのみ多からむ、されど傍にゐて、慰めもしはげましもすれど、又本の如くなり給はむ、其上さばかりの腕もちたる人は、今の世に多くはなしと、世にきこえたる御身なれど、一たびなさむと思ふことに、何のならぬ事かあるべき、よしならぬにもせよ、ともに〳〵にはげみなど、それにれひしく貧はなしとかや、それよと、春とはいへどまださむく、老いてさぞかしと、あつきは親に、身は名ばかりなる衾のうち、端と端とを折敷きて、すきまありとも思はぬを、いかにしても來ぬらむ、風は肌膚にしみわたるに、せめて彼を抱きて寝なむ身も暖かく、彼もまた親の肌膚にまさるものよもあらじをと思へど、かくてあらむいつまでも、わが身にのみすがりゐて、なづきまつらぬのみか、他人とさへ思へるやうなり、いで寒しとも、慣るれど何の事かあらむ、世には懐子などいひて、親よりなづかしがるもあるに、かれとてもなれぬことはよもあるまじと、強ひてつきやり、わが身は眠りたるふりして、いやがりつゝも遂に祖父の許に眠るを見て、ほと溜息つきつゝ、いかでこれがいつまでもつゞくやうにと、心の中に祈りつゞけぬ。かくて漸くになづくにつけては、わが願はや叶へり、折を見てこそ頼むべけれ、それまでにもしひそかに通へることのえれもせむ、事をやぶる種ともならむ、今暫しの間は、かまへて消息をも打絶えてあらむと、打忍びける中に、今日はとくれ明日はとたちて、いつしか五月の空ともなりぬ。

（ぬ）

勝藏は此日頃ありし音づれも絶えはてぬれど、いかな

る事ならむ、いつぞや彼がいひしごとく、金子さはにもてくるといふ聟をぞ、理なう去ひられしか、かれに限りては聞入るゝこともあるまじ、さるにてもわがこの頃の貧しさに、見るかげもなくなりしをうとみて、心のかはりしにはあらざるか、何にもせよ理由こそあらめ、今また他人に添ふ事もあらど、かの子のいとしさいはむかたなし、とはよも忘れはせじ、さどれ今われは歸ることもならず、又こなたに來たりとて、とても活計のたつべき道なしと思ひくづをれて、子をも思はず、吾をも見限りしか、よしさることもあらど、やはか其儘にれくべき、いでこれより樣子さぐりてむと、千々に思ひみだれつゝ、何れもひけむ道具箱かいさぐりて、巾びろの鑿とりいだし、腰にさしてぞいそぎける。をやみなくふりすさびにし五月雨は、いつしか晴わたりぬれど、雲の脚なほ早く、又今にもふり出でひとす。月や

ためになく、いづこならむ、時鳥の血をはく聲かしましきに、手拭まぶかに打かぶり、赤土の道ぬかる溜池の溝にそひて歩みながら、かの鳥は黄泉の使ときくを、さてもわが思へる如く、彼かきたなきこゝろもてらむにはなど、口の内につぶやきつゝ、漸う田町にゆきて、勝手知りたる裏口に息をこらして、千々に群來る蚊をも、うたど音たゝむと撫さすりつゝいかに〳〵とうかゞひゐたり。

落花

柴田千稻

第四　能く御聞きやれ

巖は尚轉じ得べけれど、席は尚捲くを得べけれど、丈夫の志は容易に動かし難し。若武者は跪きて倒れたる女の側に身を寄せつ、曇りたる聲を勵まして、喃

で我身の嬉しからざらん。御身は我が外々しき振舞を惡しと怨み給ふべけれど、されど御身が今日迄の苦節は此親家如何で知らぬ事が御座あるべき。御身が辛苦の淵に陥りて倘我身を思ひたまふ熱き情を如何で嬉しと思はぬ事の御座らうぞ、されど御見やれ、世は刈菰の亂れ〳〵て醜の奴輩蔓りはこらひ、恐くも現神の大御身なから、吉野の奥の狹霧に御衣をひたされ給ふを見上參らすれど、誰か民たるもの安らかに眠るに忍びられうぞ、素より武士の家に生れたる此身は、それを傍目に見過し難く、遂に梱を蹴つて家出致し申したり。誠に御身を置きて故鄕の地を去るに忍びざりしかど、さぞかし我が去りし後にて悲しみ給はんとは思ひしかど、然しなまじひに御身に逢はゞ、私情の爲に心も弱りて、我決心も緩まんものと、つれなき振舞とは思ひしかど、殊更知らせも致さゞりき。其の時の我胸中の苦悶を察し給へ。一度劒を提げて勤王の軍に從ふ上は、元より生きては歸らじ生きては再び故鄕の土を踏まざる覺悟なれど、それよりして血の雨にぬれて修羅の巷をさまよふ間も、只一時御身の事を忘れたる事はなかりしぞ、御身の面影目前を遮りて腕もにぶり心も弱りし事度々なりしが、其時每女々しと自ら勵し候て、早きものよ年は既に四年を過したり。アヽ思ひもかけざる事哉。我が去りし跡にて、御身の父上母上も身まかり給ひたりしとは、あまつさへ御身がかく悲酸の境に陷りたまひしとは、されど喃皐月殿、よく我が云ふことを御聞きやれよ、我身此度の戰爭に死れくれ候ひて、生甲斐なき生命を存へ申し、落武者の身となり候ふも、再び君が旗を擧げさせ給ふ眞先に駒をたてゝ、潔き討死いたす覺悟で御座るぞ、喃こゝぢや、御身も武士の娘なれどかゝることは辨へあるべき筈。私の爲に若し覺悟の心鈍り、情の爲にひかされて若しや身を惜む如き事あらむ、君に對し親に對し、何と言譯が御座らう

ぞ。又御身も我がかゝる不義の者とならば、心よしとは思ひ給ふまじ、又御身の身の爲にも、死ぬべき此身を頼まんより、若し頼なき夢の間の契を結ばゞ、たとひ父母の結びたまひし縁なりとは云へ、我がなき跡の悲嘆は殊更に候はんぞ。喃梟月殿、御身の爲我が爲、此縁は過し昔の夢とあきらめ給ひ候へ。浮沈あるは世の常の習、離れ難きを離るるも武士の面目には代へ難し。女とは云へかゝる覺悟の無くてなんとしやうぞ、エゝ何を御泣きやる、我が申す事が譯り申さぬか、聞きわけなき振舞で御座るぞ。女々しう御座るは、のみならず御身と我身とは、契り離き縁で御座るぞ。さ驚き給ふも道理で御座れど、其由は我が申さずとも自ら知れ申さん。なれど喃、御身の眞心は死すとも必らず忘れ申すまじ、忘れんとすとも忘られ候ふまじ。さらば御身を自愛して病み給ふな。草葉の蔭にて行末か[illegible]

固く心を決してつと立ち上りたれど、恩愛の羈絆は流石に切り棄て難く、草摺に縋りつきし女の纎手は千斤の重あり。哀れや其胸中は引裂るゝが如くなるらん。夜は森々たり。高き梢になく梟の聲も凄し。霜に移ろふ菊紅葉、風に誘はるる冬の枯葉の、散りて歸らぬ人の生命、生きては再び此現世に遇ひまつり難しと思へば、女はさながら雨なす涙を拂ひ兼ねて、身は消ゆ心も失せ、千重に亂るゝ秋の千艸の、胸はさながら裂れむしられ、麻の苧のもつれてかゝる悲しさと怨めしさとに、若武者が鎧の草摺にしかと縋りつき、枯れたる聲を震はして、さ、さらばどうあつても、此處を立去り給ふとか』。『中々の事、何條猶豫致すべき、此處御離しあれ』と、振りはどかんとするを、尚追ひ縋りて其足元に身を轉ばしつ、妾も武士の娘に候へば、強ては留めまつらねば、今暫し、暫し持ちて給はれや。[illegible]

かけて榮ゑ給へとは君にこそ祈り候はめ、御限に覺ゑ候其御言葉、聞くも忌々しう候、其仰、せめて只一言死ねとしものたまはゞ、如何ばかり嬉しう覺ゑ候はんものを、よしや死ねとのたまはずとも、君は仰せられずとも、おぢきなき浮世頼なき此世に、最早一時も生存へんとも思ひ候はず。喃三郎殿、今生の御名殘に一の御顏こそ候ふなれ、と。萎れたる顏を擡げて若武者を見上れば、蒼色めやつれたる頰には、亂れたる雲鬢群りかゝり、露の滴溢るゝ眼には自ら決心の光を宿しつ。かくて聲を絞りて云ふ、最早女々しう留めたて致し申さねば、只一つの御願は、君が御手にかけて此身を、せめて御手にかゝりて相果なば、たどり行く死出の旅路も心嬉しう候はん。喃三郎殿。せめては和君が御手にかゝりて果てんとこそ覺ゑ候へ。と細々しき兩手を擧げて、拜むが如く訴ふる樣の哀れさいぢらしさ、丈夫の腸もいかで九回せざらん。涙ある者は誰か泣かざる者あらん。若武者は怠堪へ兼ねて思はず滿身を震はしつ。目も眩むばかり蹌踉として倒れんとせしが、硫石に其決心は動かずと見ゑ、態と聲を高らかに荒らげて、如何に申すとも聞譯なられぢやる事哉。御身を殺さんと思はゞ、何條言葉を盡して先に理を述べうぞ、死にて何の益が御座るか、かゝる事申さるゝも眞は我を苦しめんとの謀計で御座らう。よし左程死たくば死にて御見やれ。後の世かけて我が緣切らうぞ、悲しうれぢやるか、さらば思ひ留り候へ、思ひ直して此處御のきやれ。こゝうるさうれちやるはと、心を鬼にして縋る女の身を拂ひのけ、躍るが如く表へ走り出れば、後に聞ゆるは血に泣く悲鳴の一聲、起ち上りて又倒るゝ音、思はず足を留めて顧みたれど、玆一思ひ弓矢八幡恩愛の覊絆はかくの通り眞二つと、又夢中に一町計り馳せ行けり。草は其余勢の風を受けて颯として鳴りぬ。

暫く走りて炎ゆるが如き息を吐きて長大息をなし、ためらひ勝に十歩に足を留め、五歩に顧み、漸う二町ばかり歩みしが、愈々後髮引房さるゝ如く、心躍り思炎ゑ、胸益々安からで足は前に進み兼ね、詮方なくてつつと立留まりしが、やがて体を投げ出して、草の中に身を埋めつゝ、熱涙を絞りぬ。かくて後漸う草の中より身を起して立上り、天を仰いて沈默せしが、何思ひけん輕く默頭き、又元來し道へ踵を返せり。月は雲を出たり。地に落つる若武者の影は、蟲の音の間の縫うて漸々として薄し。

むら雲（其二）

白魚女史

我ながらあきもはてたり、此の身。淺ましとも淺ましきわが心や。何とて、此のやうなるあやしき露には、ぬれまどふならん。思へど／＼深き因果、

我とわが心を空虚にして、一向に忘れも忘れもはてんとするものを、なほうつるにうつる人の影、あふれにあふるゝ涙の色。はや人にさへいぶかりとはるゝやうなりにたれど、いつまで露ぞとぞかりは、答へは置かれまじ。もしや、この底の雫をくみも知られなむ如何にせん。消えね／＼、只消えね。消ゆるが寧。ゆるし玉へ母樣、先き立ち參らすは。あはれ神樣、願ひまゐらすは、此の不孝者不悌ものを、早うならくの底にれとしも沈めもはてさせ玉へと、夜着の中に泣き沈みたる少女、年は二八、つぼみの口もとやさしく、桂の眉に、花の香、月の影はこもりて見えながら、頰には紅の色も匂ひもなく、身はやつれにやつれて、青柳の糸より細き手にかきあぐる髮にも、解けぬ心は、それと知られて、げにむすび苦しげなり。

こやまづ子。妹や。心地はいかにぞ。藥もて來ぬ。





姉のかづ子。年も顔も二九からぬ少女の例に引くべく、姿も聲もやさしう、ねぶりてかとて、妹の顔をさしのぞき、さるにても疲れにたる事や、何をこのやうに思ひはみだれてとて、靜子が頰のあたりに散りたる髪をばかきながら、ほろりとおとす一滴。さらぬだに、氣も魂魄もひねにたる今日此の頃のしづ子、ふとおどろきて起き上り、姉上さまにてかとの一聲、草葉によわる虫の音よりも細げなり。

かづ子は、つくぐくと妹の樣子をばうちながめたるが、さつと窓を押しわけて、げに秋と云へば、其處も此處も露のみしげく、淺芽にむせぶ虫の音、尾上に迷ふ鹿の聲、しぎたつ澤にはあらずとも、心なき身にさへしむものを、垂籠たる御身の、嘸やむすぼゝれてならん。さは云へ、靜子。此の軒の萩の葉を見ねかし。露はものなる草葉にてだに、さてもひるまはあるものを、ひとり御身の袖の乾くまなきは、よく〳〵の露。そも如何なる露にか。本の雫語りてよ。のう靜子。ひとりおもふはくるしきもの。姉につげよ。同じ心になりなむ。數ならねど、力ともなりてんに、敎へよ。姉にこそ告げよと云へば、あなまた姉上のはづかはしき事の玉ひてとて、やつれたる面に、さつと一ふき散りかゝる紅葉を、袖に押し包みて、言葉はなくてうつぶしたる姿いぢらし。

何の耻づかはしき。かく云ふ姉こそは、女心の一筋に、戀がれてぞ。行かれし播磨の方に、あこがれあかしてぞ。のう妹。はづかしけれど、此の頃は夢も結ばぬはとぞ。誰れも女心はかうなるものを、靜子、御身もつゝまでおもふ事語りてよ。垣も、へだても置かぬが同胞。わけて姉妹。のう靜子よといへば、彼方はたゞ下ゆく水のむせびかへるのみにて答へもなし。姉は、なほ慰めつ勞はりつ、說きつ、くどきつ、のうおもふ事を姉にな。今日此の頃の母さまの御心遣ひを、

こちは知らでか。お額に見ゐて、うちよらせ玉へる年波の、うちには見ゐでか。日來やさしき御身、母樣の御心を安めんとはおもはずや。あまりにつゝめむこそ、心も勞み、胸もふさがるなれ。のう妹よといへど、はら〳〵とおちて疊をうつ涙の音むかりにて、なは答へはなし。

姉もまた詮方つきて、諸共に涙にうち沈みたりしが、軈てまた吃度容をあらため、かくまで、包む妹に、はづかしや、妾は心あさくも、忍びかねたるまゝ、とひもせられぬに、うちも洩しぬることの、今更に口惜しさよ。嘸かし姉の心を、はしたなしとも、あさましとも、いやしみも怒りもしてならん。數ならぬ身には、最早何もの玉ひろ。妹のみには、隔てはおくまじものと思ふものをとて、はては怨みつ、悔みつしてかきくどくに、妹もやう〳〵涙を拂ひ、あな物体なや、[illegible]

結び玉ひにたる御人を思ばし玉ふは、元より道理なるものを。何とて物体なき、はしたなしなど思ひ侍らん。先きつ日より、思へむ〳〵かづ〳〵のやさしき御言の葉、まして杖とも柱とも、兼てより頼み參らする姉上樣、おもふ事、忍ぶ事のありだにせむ、何の包みなむ致し侍らん。夢思ふ事もなくて、かくやつれ、かくわき出る涙、われながらあやしう、母さまや、姉上さまの御心をのみいためまつりて、誠にわび奉らんやうも侍らず。何とて、妾は、此のやうなる名もなき病にとりもつかれもせしならむ。頭いたうなりにたり。藥玉ひねと、自らすゝみて苦きものだに飲まむとするに、おもふことありとのみ思ひつめたる姉も、半はうたがひ、半は解けず。誠に病にてか。さりとて名ある醫師三人が、三人ながら、思ひより出でたる病なりと云はるゝものをと、何れとも定め兼ねしが、あながち[illegible]

づかしうて、うちもおかすものにはあらじ。必長う、折にふれ、物につけて、それと尋ねなど、いつかはあかす事もあらむと思ひ返へし。げにさなりしよ、あたら事のみ云ひて、要用なる藥忘れたり。いざ〳〵飲みね。何か口なはし參らせむかなどとて、いろ〳〵と何やら甘きもの取り出でゝすゝめなどし、猶慰むるごとく、徒らなる自らがこゝろに思ひくらべて、御身をむけがし參らせたるあさましさよ。許されよ、とて、かづ子はひとり庭の面をうちながめて、げに年月は早きものかな。秋もはや半になりにたり。はや小松が下の木の子などもよからん。のう靜子、早うよくなりね。諸共に木の子や狩らん、さゝ栗や拾はん。今日は、粥なりとすゝりね。何かはしきものはあらずかなど、ゝ頻りに慰むる折しも、軒端ちかう雁がねの聲。かづ子は思はず空を見あげて、春霞かすみていにし雁がねの、今また聲を帆にあげて、かづかき來にたり。近う出で

ゝ見ね。誠に弁取らすべきものはあらず。ようつらなりて來にたる、同胞どちか、いもせどちか。むつましげやと見あぐる姉の袖にすがりて、さすがにうちわたす妹の心の中、迷ふは何處の空、何の霧。



春夜雨　　徳大寺實則

花の上にゆめのうき橋かけかへて
おづこゝろなき夜半のあめ哉

氷上春月　　久我建通

大ゐ川かすめるまつの木のまより
もりくる月のかげぞのどけき

海邊春月　　津輕承昭

汐干がり今はとかへるゆふぐれの
すさきにかすむ春のよのつき

山路雉　長谷信篤
かすみたつ春の山路をこえゆけば
そこともわかずきゞす鳴なり

遠村柳　松浦詮
里遠みみどりのふかくかすめるは
やなぎのけぶるところなり鳬

晴天鶴　諏訪忠元
なきわたるたづが音高しれは空は
さはるものなく晴わたりけり

朝雲雀　宮地嚴夫
ほの〴〵と野末の花も見えそめて
明ゆくそらになくひばりかな

夕花　小出粲
[illegible]
まだくれはてず花のこずゑは

山家經年　三浦千春
わが山にゆきてはかへる雲をのみ
おくりむかへて幾世へぬらむ

二見か浦にて　岡部譲
かゞみなす朝日さやけし玉くしげ
ふた見が浦のあけがたのそら

谷鶯　大畑弘國
うぐひすの聲にきえゆく谷がけの
ゆきこそ花のはじめなりけれ

湖邊花　三輪義方
にはをよみしがの浦わをこぎ行ば
ひら山ざくらはなさかりなり

仝　仝
春さむきはこねのうみもさく花の
[illegible]

空閨殘燈　安齋篤敬

山風のまど吹くれとにゆめさめて
むかし戀しきともしびのかげ

春月訪友　永石徳文

おぼろなる月の光りもかたぶきぬ
むかしがたりに夜や更ぬらん

霞添山色　近衛貞子

春がすみたてるを見れど動きなき
やまのすがたもかはりける哉

月前花　島津輯子

はな見んと明つるまでに匂ふかな
かすむとやまの春の夜のつき

雨中春草　蜂須賀隨子

ふる雨はいろなきものを春の野の
草のみどりをいかでそむらん

晩霞　柳原愛子

富士のねの雪も匂ひてあかねさす
ゆふ日の上にかすみたな引く

春湖　小池道子

ひらのねの雪はかすみに消はてゝ
まのゝ入江にはるかせぞふく

蕨　日野西廣子

思ふどち折わらそひしはつわらび
ひとしくわけて家づとにせん

春雨　保科節子

きのふけふ降春さめにさくらばな
今はのこらずちりはてぬらん

蛙　西四辻茂子

さくら花ちりうかぶより小山田の
水にかはづのなかぬ日もなし

春遊　北島以登子

櫻がりしほひがりにととりどりに

はるはこゝろのあくがれに鳧

遲日　小笠原艶子

思ふどちすみれつむかな春の日の
まだくれそめぬ野べの遠かた

春庭　三島竹子

春くれど草木いろ／＼はなさきて
みる目にわかぬにはの面かな

春駒　原田蒼生子

あけまきが捕へかねたる放れごま
野のわか草ぞつなぎとめける

雨中雉　鶴久子

狩びともあめには來じと思ふ野に
あわたゞしくも鳴きゝすかな

野徑蝶　中島歌子

をとめ子に交りて蝶もすみれさく

遊絲　服部磯子

打かすむ野べのすみれにぬる蝶の
ゆめにさはらずあそぶ糸ゆふ

若草　宮地琴與子

我やどのかきねの草のあさみどり
あさくも春のいろは見えけり

月前花　田邊和氣子

身にしみし秋のあはれは夢なれや
おぼろ月よのはなのしたかげ

里梅　安東きく子

この里にありと聞つるなにがしの
庭なつかしきうめの香ぞする

待花　内田ゆか子

打ちわたす山邊を見つゝさくら花
さくをまつ間ぞ久しかりける

たま川の淸きながれにたりたちて
　花かげながら若鮎くまゝし

水鄕霞　　師岡須賀子

大井川きのふのきりのまよひにも
　たちまさりたる春がすみかな

山花盛　　仝

山かつが歸さにきけむたなびける
　たかねの雲はさくらなりけり

春夜もの丶音をきゝてよめる歌　　海上壽子

れぼろ夜の、月を愛つゝ、梅の花、匂へる宿に、みやびをや、吹すさぶらむ、青柳の、まなへる宿に、たをやめや、かきならすらむ、笛竹の、ふしころわかね、玉琴の、音ころたへなれ、あひにあひて、いやれもしろき、春の夜はかな。



●御代拜　去月二十日、春季皇靈祭御祭典の節、宮中顧問官侯爵鍋島直大氏は、天皇陛下の御代拜を、權掌侍吉見光子は、皇太后陛下の御代拜を、東宮侍從大迫貞武氏は、皇太子殿下の御代拜を、孰れも奉仕せられたり。

●御下賜金　大和の十津川村には、夫の文久、元治、慶應の役王師に從ひて戰死したる人々を祀れる招魂社ありしが、今回其維持費として宮內省より金二百圓下賜せらるゝ旨、奈良縣へ達せられたり。私設招魂社に下賜金ありしは、之が嚆矢なるべし。

●楠公首塚　有志者の曰く、南朝の忠臣楠正成朝

臣の首塚は、古來觀心寺に在りと傳ふれども、實は當時賊徒の暴威を恐れ、陽に觀心寺に埋葬すと唱へて、陰に河内國安養院、即ち金剛輪寺に埋めしものなることは、同寺に保存せる左の和田正遠の石碑建立狀に徵するも歴然たり。

和田正遠之書翰寫

一翰令啓達候御寺内無別條珍重奉存候然者判官殿中院最早今少相成候就夫於貴寺石碑相建申度旨愚息沙汰被申候得共御存之通り城外騒敗候故其儀及延引候貴院へ御頼可申間高さ五尺五寸計之五輪に被仰付御建可給候高之義も文明院殿石碑より高くは難致候はゝん哉と沙汰申候其旨御意得可給候石之義は自貴寺東之山内より爲引可申候石工之者共明日より指遣し可申候宜御指圖奉願候　恐惶謹言

延元々年　七月三日　將監正遠　華押

安養院方丈

殊に右安養院(古市郡駒ヶ谷村大字駒ヶ谷)の山巓には一基の古墳ありて、舊藩の頃には公の嫡流なる甲斐莊氏より、屢々修繕を加へ、且年々供養料とて、玄米三俵づゝを寄進せしは、左の書翰に據るも明かなりとす。

寄奉之事

一米三俵　一俵者五斗一升

右者其寺山中以
先祖考君墳墓有之舊因緣爲備奠供之用雖聊也於河内國知行内永令寄奉到年十一月入處全不可有相違者也

弘化四年丁未春二月　正誼　華押

金剛輪寺　律主

然るに維新後、金剛輪寺は大破に及び、遂に廢寺となり、右首塚も樵夫牧兒の遊戲場となり、將に荒廢に歸せんとす、慨せざる可けんや、とて同地の眞銅新太郎、山口鼎三二氏外五名發起人となり、弘く有志者の義金を募集し、墳墓を修繕して、公の忠魂を慰めんとの擧あり。其の筋の認可を得て、寄附金募集中なるが、税所子爵、水谷川男爵を始め、北畠控訴院長、内海知事、

大浦山口縣知事、小野田警保局長、深瀨石川外六郡長、東尾代議士等も賛成を表せりと云ふ。

●女子高等師範學校卒業證書授與式　女子高等師範學校にては、今回卒業したる師範學科十九人、附屬高等女學校補習科二十二人、附屬高等女學校本科三十八人に、去月二十四日卒業證書を授與したり。今式の次第を示せむ、午前九時三十分一同式場に入り、先づ唱歌を以て始まり、次に卒業證書授與あり、了りて秋月校長の告辭、西園寺文部大臣の祝辭、女子高等師範學科卒業生總代中西てつ子の謝辭、女子高等學校卒業生總代島川たけ子の謝辭、次に唱歌を以て式を終る。當日來賓の重なる人々は、西園寺文部大臣、田中樞密顧問官、同夫人、濱尾大學總長、同夫人、嘉納高等師範學校長にして、其他文部省高等官、官立學校長、教官等凡二百餘人なりき。

さて、その祝辭、謝辭及卒業者の姓名等をかゝげんに。

女子學校長秋月新太郎告辭

卒業生諸氏本日ハ當校創立後第六回ノ紀念辰ニ属セリ茲ニ證書授與式ヲ擧ケ以テ諸氏カ本校規定スル諸學科ノ業ヲ卒ヘタルヲ證ス榮ナリト謂フヘシ惟フニ諸氏カ多年螢雪ノ功ヲ積ミ以テ今日ニ至リシハ猶ホ草木ノ風霜ヲ凌キ得テ茲ニ美麗ナル花ヲ開キタルカ如シ花ノ草木ニ於ケル固ヨリ美ニシテ賞スヘシ然レトモ花アリテ實ナクンハ未タ其眞ニ賞スヘキヲ知ラス人モ亦タ何ソ之ニ異ナランヤ諸氏ハ今ヨリ此校ヲ去リテ人ノ師ト爲リ妻ト爲リ又母ト爲ル者ナリ三ノ者其何レタルヲ問ハス均シク國家教育ノ一部ヲ負擔スルモノナレハ責任最モ大ナリトス其責任ヲ盡シテ以テ國家教育ノ基本ヲ立ツルハ則チ是レ善良ノ美果ヲ收ムルナリ是レ完全ノ地位ニ達スルナリ果シテ此ノ如クンハ啻ニ諸氏ノ光榮ノミナラス亦以テ本校ノ光榮ト爲スヘシ諸氏其レ之ヲ勗メヨ

西園寺文部大臣祝辭大意

本日ハ此名譽アル式場ニ臨ミ諸君ノ卒業ヲ祝スルハ本大臣ノ欣喜スル所ナリ

諺ニ一國ノ文明ハ女子ノ品位如何ニ於テ之ヲナスト蓋シ女子ノ社會ニ於ケル家庭ノ教育ヨリ鄕黨ノ風俗ニ及

ヒ牽テ一國ノ汚隆ニ至ル皆是レ女子ノ學問ニ根底セサルヲ得ス今ヤ帝國ノ進歩ハ駸々トシテ世界ノ視聽ヲ驚カセリ然ルニ獨リ女子教育ノ點ニ於テハ未タ此隆運ニ伴フコト能ハサルモノアルニ似タリ本大臣カ深ク憂フル所ニシテ本校卒業生諸君ノ如キ其人ニ向ヒテ屬望スルノ大ナル所以ナリ

諸君ハ今日多年ノ勉强ニ因リ終ニ其目的ヲ遂ゲラレタリ本大臣ハ益々女德ヲ修メ勉强ノ果實ヲ實地ニ活用シ以テ帝國ノ文明ヲ翼贊セラレンコトヲ望ム

女子高等師範學科卒業生總代中西てつ謝辭

何事も足らひゆくとの大御代にうまれあひたるよろこびは今更にいふへくもあらねとさてのみいひてあるへからさることとなりさるは我女子高等師範學校にてはけふを吉き日と定めて我等のために卒業證書授與の盛典をわけられ諸先生の來臨を忝けなくするのみか文部大臣閣下校長閣下の懇なるみことばをたまはりぬることとなり我等のよろこびは實に何にかたとへんろもしく敎育のことは廣大無邊にして其及ぼすところ一身一家より天下國家の上にわたれりこれを思へば我等は此譽ある式場にころ列なれ殆逡巡して爲すところを知らさら

民を養成せざるべからざるに於てをやさはいへかしこくもかねて下したまひし勅語の大御旨にたがひ年頃師の君達の懇に敎へみちびきたまひしことをまもり力の及ばんかぎり勉め勵みなば或は鴻恩の萬一にむくい奉り今日のほまれをして永く身ころはしむることを得べきかいまこの盛典にあつかれることのうれしさ餘りて一言申まつるになん

高等女學校卒業生總代島川たけ謝辭

今日こゝに卒業證書授與の式をあげさせらるわれ等此盛典に列なることを得るも偏に明らけき御代の御蔭と校長の君をはしめ奉り師の君たちの厚き御めぐみによるなりけりわはれはてもなく限りもなき御いつくしみを何にたとへてか謝し奉るへきはたいつれの時にか忘るへき學びの業にかきりあれは今日此庭にたちはなるともひたすらかしこき勅語の御おもむけに從ひ年頃さとし給ひし御敎へをまもるへとして航海の羅針暗夜の燈とたのみ朝夕に身を省りみて行をつゝしみ業をはげみ女の道にそむかぬやういそしみつゝせめて深き御めぐみの萬々一をたにむくい奉らんと思ひ定めつる一ふしを

女子高等師範學科卒業生

(外) 京都府平民 中西てつ 明治八年二月生
(外) 富山縣平民 神通せき 明治八年四月生
(外) 京都府士族 關口しづこ 明治六年十一月生
福岡縣平民 津和崎こう 明治五年二月生
(外) 德島縣士族 片山くみ 明治七年十二月生
長野縣士族 澤とも 明治六年十一月生
(外) 新潟縣平民 塚田つぎ 明治五年十一月生
栃木縣士族 丹羽ちやう 明治八年三月生
(外) 滋賀縣士族 中澤しづ尾 明治七年九月生
長野縣士族 林しやう 明治五年八月生
(外) 山梨縣平民 小田切浦乃 明治五年一月生
群馬縣士族 美濃部樂 明治五年二月生
佐賀縣士族 糸山伸 明治五年四月生
東京府平民 種村ゆき 明治九年四月生
福岡縣士族 味岡はな 明治五年三月生
(外) 石川縣平民 倉元いの 明治四年二月生
福島縣士族 富樫孝 明治六年三月生
香川縣士族 三宅すゑ 明治五年九月生
愛媛縣士族 岡本磐 明治五年十二月生

外ハ隨意科外國語修了

附屬高等女學校補習科卒業生

靜岡縣士族 田口うた 明治十一年三月生
福井縣士族 宮崎きさ 明治十一年四月生
埼玉縣士族 上原さね 明治十一年八月生
東京府士族 山高しげ 明治十一年五月生
兵庫縣士族 濱尾しく 明治十二年三月生
東京府平民 石川まさ 明治九年一月生
山形縣士族 成田よつ 明治十一年十二月生
東京府士族 北條とし 明治十一年十月生
靜岡縣士族 牧野しづ 明治十年十二月生
東京府士族 布施しゆん 明治十一年十一月生
東京府平民 今村とら 明治十一年七月生
兵庫縣士族 齋藤ゆきの 明治十一年四月生
東京府平民 塚越ひで 明治十二年十一月生
東京府士族 成瀨かをる 明治十二年三月生
東京府平民 猪俣みさを 明治十年十月生
東京府平民 林ゑい 明治十年九月生
東京府士族 峯千代 明治十一年三月生
北海道廳士族 石川いと 明治十年二月生
岩手縣平民 村井よし 明治十年二月生
東京府平民 田口のぶ 明治九年十月生

東京府平民　田中みち　明治十年九月生

附屬高等女學校本科卒業生

三重縣士族　島川たけ　明治十三年五月生
山口縣士族　大谷鶴　明治十三年九月生
神奈川縣平民　大熊しう　明治十二年四月生
東京府平民　今村照　明治十二年六月生
東京府士族　池田敏子　明治十三年一月生
茨城縣平民　寺西とら　明治十一年五月生
東京府士族　津田秋子　明治十三年九月生
東京府士族　柴山てる　明治十二年九月生

新潟縣平民　大矢しさ　明治九年二月生
東京府平民　松野せん　明治十二年十月生
東京府平民　五十子のぶゑ　明治十二年六月生
茨木縣平民　田中いよ　明治十一年一月生
長野縣士族　草間貞　明治十一年六月生
東京府士族　野上たか　明治十二年七月生
高知縣士族　川久保靜枝　明治十二年十一月生
東京府士族　神方幸　明治十二年八月生
高知縣士族　武市治　明治十三年二月生

東京府平民　岩出鐸　明治十二年十二月生
茨城縣平民　菊池さく　明治十三年一月生
東京府平民　辻信　明治十二年二月生
東京府平民　井上幹　明治十二年八月生
山口縣士族　渡邊春　明治十一年二月生
東京府平民　原田てい　明治十二年十二月生
北海道廳士族　金田智惠　明治十二年五月生
東京府平民　風間わか　明治十二年三月生
東京府華族　田中よし　明治十三年九月生
東京府士族　山縣のふ　[illegible]

京都府士族　鴨脚芳　明治十二年八月生
靜岡縣華族　赤松かつ　明治十二年十一月生
岡山縣士族　中澤愛子　明治十三年十二月生
東京府士族　渡邊わか　明治十三年四月生
德島縣平民　原田英榮　明治十二年十一月生
東京府士族　神保英　明治十一年一月生
靜岡縣華族　黒田文　明治十二年九月生
東京府平民　小野すみ　明治十一年十月生
山口縣士族　高田秀　明治十三年六月生
大阪府平民　西尾廣　[illegible]

東京府平民　粉谷千代　明治十一年十一月生
東京府士族　石坂留　明治十年九月生

●小學教員年功加俸國庫補助法　は既に議會の協賛を經たるを以て、御裁可の上、公布せられたり。同法によれば尋常高等各小學校の正教員及準教員にして、五個年以上同一學校に勤續するものには、本俸の百分の十五を給し、後五個年を加ふる毎に、更に百分の十を加へ、百分の三十五に至りて止むものとす。

●大坂高等女學校卒業證書授與式　市立大阪高等女學校にては去月三十一日午前十時より、第九回卒業證書授與式を擧行せり。式場にては、柴校長先づ　勅語を捧讀し、生徒の奉答歌合唱了り、校長の報告に次ぎ證書賞品を授與し、次に校長の告辭、知事代理片岡書記官の祝辭及び來賓扇谷五兵衛氏の演説あり。卒業生總代上木ひさ子答辭を誦し、君が代の合唱を以て式を終り、別室に於て折詰の饗應あり、正午退散せり。來賓は片岡書記官、鈴木警部長、七里收税長、林課長、區長、各學校及小學校、幼稚園長、市會議員、市學務委員、商議員、新聞社員等なりき。當日樓上には生徒の製作品を陳列し、卒業生徒の服裝は質素を尙べり、卒業生徒等員數左の如し。

本科二十八名　技藝專修科四十三名　保姆養成科三名
合計七十四名
生徒現數五百七十二名　卒業生徒數三百六十名(今回共)

●奈良高等女學校　本月より開始せんとする奈良縣高等女學校は、本年に限り尋常小學校四箇年の課定卒業者は、普通科第一年級に、高等小學校第一年級修業のものは第二年級に、高等小學校第二年級修業の者は第三年級に、高等小學校第三年級第四年級修業の者は同第四年級に、無試驗入學を許すよし、又同校寄宿舍には、老年にて着實なる舍監を置き、日常家事に屬する諸般の事項を行住坐臥の間に練習せしむるのみならず、其飲食の如きは特に老練なる婦女を雇入れ、舍監

之を使役し、生徒をして共に庖厨の事を實地に練習せしめ、傍ら節儉を旨とし、其舍費の如きも、悉皆にて一箇月四圓以上に出でざる事とし、又裁縫科は同校教科中最も重きを置き、其材料の如きも吳服店より之を供給せしめ、餘暇あれば必ず裁縫に從事せしめて、彼の女學生の世事に迂遠なる弊を矯正せん見込なりと云ふ。

●高等師範學校生徒卒業式　過日午前十時より擧行せらる。定刻に至り、生徒職員來賓は一同大成殿なる式場に整列し、式始まるや先づ學事報告あり、次で理化學科、博物學科、及び撰科卒業生十六名に對し、卒業證書の授與ありて後ち、加納校長告辭を述べ、次に中川文部秘書官、文部大臣の演詞を代讀し、了て卒業式總代幸津國太郎氏謝辭を朗讀す。次に所屬尋常中學科卒業生十六名に、證書授與式あり、校長の告辭及び

一同控席に於て茶菓の饗應を享けたる由、當日來賓の主なるものは牧野文部次官、濱尾大學總長、立見陸軍大學校長心得、高田陸軍經理學校長、粟屋陸軍幼年學校長、三宅醫學博士、木場普通學務局長、秋月女子師範學校長、秋月文部省參事官、中川、篠田兩女子高等師範學校教授等にして、其卒業生の人名は左の如し、

理化學科

幸津國太郎(宮崎)高良隣德(沖繩)角田傳(群馬)猪飼政太郎(愛知)小山光彦(和歌山)大須賀鐵雄(京都)古山京治郎(宮城)有坂幾造(群馬)
木村忠治郎(愛媛)砂崎德造(三重)

博物學科

撰科(物理化學)

吉田明見(石川)永澤定一(青森)大森英三郎(愛媛)鈴木正治(長野)
梅田與三治郎(岐阜)佐伯秀太郎(廣島)

●實業教育　今般福島縣蠶業學校の設置を認可し、開校の月より向ふ五箇年間、一箇年金千五百圓づゝ、北海道有珠郡各村公立紋鼈農業補習學校、學則並に授業料額及徵收方法を認可し、開校の月より向ふ五箇

依り交付する旨、去月十七日文部省より指令せり。

●織物學校　今度桐生織物學校は國庫より五箇年間、二千圓づゝの補助を與へらるゝ事となり、地方よりも年々二千圓を支出し、更に有志者中より二千圓を醵出するに决したるにより、愈四月一日を以て盛なる開校式を擧行すといふ、同校の教科目は織物科、染色科、撚絲科、仕上科等なり。

●工業學校　各地方には、實業學校勃興するに、東京市中には、官立にては東京工業學校、私立にては東京工手學校、其他二三の設置あれど、一の市立工業學校なきは甚だ遺憾なりとて、東京工業學校長手島精一氏、昨年東京市學務委員會に向ひ、市立の低等工業學校を設置すべし、との意見書を提出し、委員會多數を以て之を可决し、當局者に其設置を促すうち、夫の鐵管事件の爲め市政に澁滯を生じ、一時中絶の姿なりしが、近頃に至り此問題再起したれど、遠からず市會の議事に上り、低等工業學校の設置を見るならんと云ふ。

●學術探檢　新領地臺灣は内地と氣候風土を異にし、動植物より地質農林衛生人類等に至るまで、特殊のものに屬せざるはなく、殊に農業に於て、米作三度の收穫の如き、茶業、糖製、樟腦の如き、其他動植物、殖産保護等に關する地質と、農林との殖産發達上の關係、幷に造營物及各種天然物の關係より、醫學上風土病等の研究、さては議論の囂々たる阿片處分の問題の如き、何れも學術上の研究を要するものなりとて、其筋に於ては、帝國大學專門の教授七名を派遣して、右に關する一切の探究をなさしむることに决し、其費用も既に議會に請求中なるが、果して派遣の場合とならば、其期日は多分來る暑中休暇頃ならんと云ふ。

●臺灣學務部の計畫　臺灣學務部長、伊澤修二氏の一行が着臺の上は、先づ内地より引率せし學校教員三十七名を、臺北なる土語研究所に入學せしめ、大凡三

ヶ月間必要なる土語及び其他有用の科目を教授し、而して後ち十四ヶ所の邦語學校へ、二名宛配置し、且つ邦語學校の校長には、其土地に於て名望ある町村長等を擧げて之に任じ、就學期は大凡六ヶ月間位とし、邦語の普及を計る由なるが、又た之れに次て、臺北に模範學校を設立し、臺灣に於ける小學校設立の摸範研究をなし、又た官立帝國語學校等をも設置する筈なりと云ふ。

●寶冠章(婦人の叙勳)　明治廿七八年の戰役に關しては、婦人にして看護其他に盡力せしもの尠からざれど、當路に於ては、夫れ〱行賞あるべき筈なれども、婦人に下賜せらるべき寶冠章は五等までにして、他の勳章の六等以下に相當する功勳者に下賜さるゝものなければ、今度寶冠章を増加して八等までとし、夫れ〱婦人にも行賞さるゝことに内定したりと。

●一哩の速力比較光と電氣 [illegible]

間は、一秒の一億分の五千百二なれど、一秒に十九萬六千哩を走る勘定なり。電氣は一秒の千萬分の三百四十七にして、即ち一秒毎に二十八萬八千哩を通過す可し。

地震と音響　精密なる機械を以て地震の一哩を經過する時間を計りしに半秒にして、此勢を以てすれど世界を一週するに、三時間半を要する割合なり。又水中の音響は、其時間一秒を要し、空中に在りては五秒を費やす可し。

電車と滊車　昨年九月、米國のバルチモーア　オハヨー鐵道會社に於て、電車の速力を試驗せしに、五十九秒にて一哩を走り、一昨年五月紐育中央鐵道會社の實驗に據れは、滊車は同哩程を三十二秒にて走りたり。

鳥と犬　鷹は一哩を飛ぶに二十四秒、鳩は一分九秒よ

り [illegible]

分一秒乃至五秒を要せり。

自轉車　二人乗りの自轉車の速力は、昨年十二月米國ワイオミン州の首府シャイエンに於て、一分十七秒に一哩を直線に走りしを以て最上とし、一人乗りは一分二十五秒を頂上とするが如し。

馬　馬の速力は、サルヴエートーと云へる駿馬が一哩を一分三十五秒半にして走りしを最も急なるものとし、又「だく」はアリックスが二分三秒と四分の三にて走りしを最も早きものとす。

人の速力　人の疾走する速力は、ダブルユージージョージ氏が四分十二秒四分の三にて一哩を走りしを第一とし、ラーピーコンネッフ氏の四分十七秒を第二とす。又游泳は英人タイアー氏の二十七分二十一秒を第一とし、米人ホイテカー氏の二十八分五十五秒を第二とす、端艇は米人エリスワード氏が五分一秒にてフローリダ州のサヴアンナー河を漕ぎしを以て最も速なるものとす。

水雷艇と彈丸　水雷艇の最も迅速なるものは、英國のヤーロー會社に於て製造せる、露國のソコル號の一哩を一分四十五秒にて走りしを最とし、又砲彈は一秒に三千三百呎の速力とすれど、一哩を一秒と十分の六にて達し得べし。

●人工孵卵　人工を以て魚鳥の卵を孵化するは自然に悖り、畢竟好事家の慰に過ぎずと思ふものあれど、決して然らず。牝鷄の如きは異種類の產卵をも能く孵化せしめ、駝鳥、龜、鼈及鰐魚等は沙中に卵を埋沒し、太陽の熱を藉りて之を孵化するを見れば、人工孵卵は各動物に應用して必しも難事に非らざるを知らん。現に佛國動物園内の溫室にては、巨蛇の卵を人工にて孵育せり。支那埃及にては、鳥糞を以て鷄卵を孵化すること往時より行はれ、前年支那人二名を傭ひ、新宿御農局試驗場にて傳習を受け、好結果を得たるも、其方

法熟練を要するが爲め、廣く行はるゝに至らずして止みしが、米國合衆國エー、コルベット氏は佛國學士會員たりし碩學リウムル氏の發明に基き、彼の馬糞孵卵法を改良し、遂に良好の結果を得、同國勸業博覽會共進會、品評會等より金牌其他の賞牌賞與を得たる事、枚擧すべからず。右の發明は歐洲家禽業家を震動せしめたるが、本邦にて家禽業の最も盛なる愛知縣、名古屋市、居住の大崎保之助氏は、在米友人より此原書を得て、頃日之を飜譯し、東京牛込神樂町池田商店より發行せしめたる由、此馬糞孵卵法にして愈我國に行はるゝに至らむ、食用雞肉、及雞卵の格價に一大變動を起すやも知るべからず。而して此事の果して我國に行はるゝや否を試驗するは、極めて興味ある事なるべしと云ふ。

●新輕氣球　獨逸ネエップリン伯は、ヴルテンベル

が爲め莫大の資産を傾盡し、今は其新發明に係る輕氣球新造の費用、六萬マルクさへ辨ずる能はざるに至れるよし、伯の考案に係る輕氣球は、卷煙草の形にして、前後左右思ひのまゝに運行自在にして、二萬呎の高さまで上るを得べく、五千磅の積載力あり、獨逸皇帝は此發明を滿足に思召され、之を海岸防禦に充つべしと宣ひ、軍人は之を用ひて敵艦の甲板を破り、敵の堡塞を攻撃せむ、効力大なるべしと言ひ、學者は今世紀の終りに至りなむ、貨物も旅客も空中にて運送するを得べしと唱へ非常の評判なりとぞ。

●其葉蓁々　世界の皇族中、英國女皇陛下の如く子孫に富ませらるゝはなかるべし、陛下には九人の子あり、其の中二人は薨去、四十一人の孫あり。其中八人は薨じ、二十三人の曾孫あり、皆健在なり、然れど都合六十三人の子孫を有せらるゝ次第にて、孫三十三人

といへども、女皇在世中に玄孫を見らるゝに至る可しと云ふ。





●女隊消防組　瑞典のナッツウと云へる所には、百五十人の強壯なる女消防組あり。元來此村にては水利甚だ宜しからず、纔かに四個の大なる桶に水を湛へ置く外、溝渠等の設とてはあらず、故に此女隊の職務は火災の時に、皆駈付て桶の水をして絶間なく充滿せしむる事なり。其時には桶の有る場所より、池沼の邊まで二列に並び、一列は順次に桶を渡し、最終の者水を汲み揚げて、他列の一人に渡せば、又順次送りして之を元の場所に送り返すなり。若し男子の居らざる時は、水の汲上げは勿論梯子水管等まで持ち來りて、非常の働きをなすと云ふ。いとめづらしきはなしならずや。

●やさしき馬　倫敦の動物園に、アルフアと稱する馬あり。斯程までに能くも馴養されたるものかなと驚かるゝ計り慧敏にして、善く人事を解し得れば、之を人閒馬と稱して、倫敦市中ろの評判熾なり。此馬は當年六歳半にして、毛は栗毛、姿勢は甚だ逞しくして奔ること迅速なり。極めて多藝にして、適當の馴養者あらば、如何なる事も敎へ得られざる事なしと思はる計りなり。今其藝能の一二を記さんに、先づ壓板の一組をハーモニアムと云ふ樂器の臺に置くに、アルフアは歯にて其樂器の棒を啣ゑ、各壓板に徐徐と己れの足を觸れて、巧みに音樂を奏で、過つ事などはをさ〳〵なく又口に鉛筆を啣ゑて、石板に己れの名を記し

或は算術の例題を解き、此等の藝を終へたるときは、普通の學生の如く、見物人一同とナップと稱する遊戲を爲す等、唯談話する能はざれど、筆談は自由に爲し得と云ふ、實に珍らしき馬と云べし。

●婦人の龜鑑　伊勢國、津市新東町、二百九十八番屋敷の古河ときに一子ありて、藤吉といへり。藤吉は豫備歩兵一等卒なるが、一昨二十七年八月征淸の軍起りて、臨時召集の噂とりどりなる折柄、母ときは眼病を惱みて、物の色彩さへ辨へ難きのみならず、生活さへ不如意なれど、藤吉は太く心を痛め、かゝる時若しも召集せられなど、母上は如何してか日を消らし給ふべき、必ず饑に迫られ給ふならん、然りとて官命の逃るべきにあらず。如何せむやと憂苦して日日樂までありしを、母ときは夫を察して、藤吉にむかひ故らに怒の體をなし、今日は如何なる時と思ふぞ、我が帝國の安危に係はる一大事の出來たるに、親や家を顧みるべきにあらず、狼狽て人の笑ひを招かんには、永劫吾子にあらじ、と熱涙を呑みて訓誡しけれど、藤吉は爰に始て安心し、應召の用意に餘念なかりしか、卽て令狀到來し、率先出發せしは、誠に健氣なる事どもなり、と郷黨この母子の志を感賞せざる者なかりき。この事彼の瓜生會といふに聞え、後來婦人の龜鑑となるべき者とて、去月廿五日銀杯に綿織絲紀念織を添へて、ときの許へ贈與方を津市役所に依賴せりといふ。

●貞松二株　内海ますは、兵庫縣下、播磨國佐用郡、平福村の士族、内海勝之の母なり。性質温順にして孝且つ貞に、平素寡言にして、又家計を理むるに巧みなり。明治七年夫篤太郎故あり婚を絕ちて實家に歸りぬ、ますは年尙二十に足らぬ程なれど、親戚故舊は切りに後夫を迎へんことを勸めつれど、ますは斷じて從はず。益父母に孝道を盡して、少しもろの歡心を

をさし〳〵愛に溺るゝが常なるを、ますは寛嚴宜しきを得て、庭幃の中常に淸風穆々として、能くその敎訓に從へるから、鄕黨に賞揚せられたり。ますは又佛を信すること深けれど、長男勝之を京都の顯道學館に入れて、佛學を修めしめし事もあり、已は銳意殖產の道に勵み、竟に大平紙を製造せんことを企圖したれど、一婦人の身を以て專ら事に任ずることを難けれど、熟練なる職工を傭ひ、勝之をして修習せしめ、自らこれを指揮監督して、明治廿三年始めて業を創めつ。さるに經驗尙淺くて、販賣の路未だ廣からざるに因り、數失敗を招けど、毫も屈撓せざるのみならず、益進みて艱難と戰ひしに、その効果顯はれて、遂に京坂地方に販路を擴張して、その辛苦を償ひ得たり。明治二十六年北米合衆國、閣龍萬國大博覽會及び第四回內國勸業博覽會に出品し、兩ながら賞を受け、本年は又宮內省に御買上の榮を辱うせり。明治廿七年の冬、勝之は徵されて近衛師團に入り、步兵の役に服し、明年水松征淸大總督宮殿下に扈して、金州に航し、その四月不幸にも病に斃れぬ。越えて五月訃音家に至る、擧家哀慟措く能はず、さるを獨りますは自若として心神を亂さず、徐ろに人々を慰めて送葬の事を果しつ。その心裡の悲哀は却りて萬斛の淚を灑す者よりも甚しかりしならん。ますは本年三十九歲、猶も一向に產業を勵み勉めて、家政を整へ能く父母に事へて少しも意に忤ふことなしと、嗚呼賢なるかな。

同縣下、川邊郡、高平村大字木器の平民、福中儀之助の母まさも亦賢婦たり。年十八にして故儀左衛門に嫁し、從順にして能く舅姑に事へ、孝養懈らず。良人を輔けて家業を經理せり。數年にして舅は病にて歿り、次ぎて良人儀左衛門も亦溘焉として逝きける、不幸の上の不幸なり。その後まさは、姑に奉ずること益厚く、良人が紀念たる四男の敎育に心を用ひけるが、

家道素より裕かならざれど、一意農業の小作に力を竭し、節儉を以て辛うじて一家の生計を支へたりしが、姑も亦二十四年の冬に病歿せり。かゝる中より長男儀之助をば、尋常師範學校を卒業せしめ、二男鐵三郎をば海軍兵學校に入學せしめ、尙三男四男をば高等小學校に通學せしめ居れり。その舅姑良人の病蓐に在りしや、まさは晝夜枕頭を離れず、專ら湯藥に侍し、看護至らざるはなかりき。まさは本年五十二歲なり。今日に至るまで、隣里鄉黨交際の禮を缺きしことなく、固く志操を守り、能く婦道を盡せるを以て、閭鄉擧りて歎賞せざる者なし、と人情浮華に流れ、德義地を拂ふ今日に、此の如き兩個の女丈夫の出づるありて、好模範を示しつるは、洵に慶すべき事ならずや。

●正誤　東京女學校につきて、この校のことにつきおのれが許に監督し給ふは眞かと問ひ起す人ありおのれはさいつころ月に兩三回ばかりの修身講話のことは諾せしかど學校監督とは何かの相違誤聞ならむ一言して問ふ人に答す



五月兼題

五日
- 歌……待郭公
- 文……除隊の兵士を迎ふる詞

廿日
- 歌……田家卯花
- 文……靖國神社に詣づ





四月五日兼題　花有遅速　（天地人のほかは原稿到着順なり）

天　岡山縣岡山市八番町　降田槙子

吉のやまさかりときゝてきてみれど
まだほころびぬはなもまじれり

地　信濃國東筑摩郡松本町　森川いね子

ふもとなる花はちれどもやまたかみ
みねのさくらぞいまさかりなる

人　下谷區西町三番地　高瀬孝子

咲く花のはやきおそきのあれどこそ
はるのながめはひさしかりけれ

こゝろして見るべきものは吉野やま
おくれさきたつ花にぞありける　住山静子

さくおそくにほふを見ればさくら花
おくれさきたつはるやあるらん　磯部つや子

あらし山ちりそめぬれどすみぞめの
くらまのはなはいまさかりなり　佐々有鄰子

雪さりゐこすゑなゝそにみよしのゝ
みねのさくらはいろまさりゆく　羽田三緒子

雲さみしよものこすゑはうつろひて
にほにさきめくおそさくらかな　河田いし子

散るもありひらくもあれば花のやま
ながめはいさゞまさるなりけり　高瀬烈子

見渡たるふもとのさくら散りはてゝ
たかねははなのかすみかゝれり　島田悦子

二つみつちりしさくらもあるものを
また咲き初めぬはなもありけり　高井孟子

山さくらさかりすぎにしこずゑにも
さかぬつぼみのなほみゆるかな　静間密子

ゆきさちる初せのやまをわけゆけば
ふもゆふかなるはなもありけり　住山巍子

嬉しさもうしさもいはんこのころは
咲き散るはなのかげをながめて　杠秀子

露さのみちりしきみればやまさくら
おくれてさけるはなもありけり　小野寺竹子

咲きぬやさ花のやまくちわけゆけば
はや散り初むるはたもありけり　大谷友子

みやこにはちり過ぎぬれさやま里の
さくらはいまぞさかりなりける　土肥仙子

ひきつゞくさかりを見せて遅くさく
さくこそはなのなさけなりけれ　三浦さき子

おそくさく花はさけどもたぐひなき　田代艶子

いろこそみゆれやまさくらは

さくら花さきもおそきもさきつきて
はるの日なかくにほひぬるかな　名取正代子

よしの山かすみのおくはちりそめて
ふもとのはなはさかりなりけり　横田須磨子

おくれじと時まちかほにさくはなも
おそきもあれはさきもありけり　上井もと子

さく花もつほみもおなしねたなから
なとてかかくもへたてあるらん　西尾直子

おなしことのさける春にあひなから
おくれてにほふはなもありけり　松井喜代子

ちるもなしのこるもおなしさくら花
これそはる邊のほたしなりける　小町谷りね子

待ちわひて咲しさくらのちる見ても
たくるゝはなはこゝろありけり　小町谷園子

よの人のこゝろのはるなかゝれと
さくもおそくもはなのさくらん　永井きい子

山さくらちりにしのちのやまかけに
おくれてさけるはなそうれしき　平澤ふさ子

みやこには散りそめぬとも山さとに
おくるゝはなのさかりたつねん　植木鋼子

さく花もこゝろしつらんさくおそく
うたてにほひのひさにしらるゝ　碓井信子

さくら花またふるさとはさかなくに　碓井武子

あづさゆみおなしはる日のさくら花
かつはちりつゝかつはさくらん　碓井和可子

朝日かけさすやまの端のさくらはな
ほかよりさきに咲き出てにけり　原三緒子

おくるゝはなへてはねなき人の世に
さくらのみこそならはさりけれ　牧野貞子

咲きてとく散るなはうしと思へはや
おくるゝはなもうれしかりけり　牧野峰子

我かやとの花のこすゑは散りぬれと
あらしのやまにくもそたなひく　牧野鶴子

心あてのはなは散りてもうれしきは
おもはぬかたに見出でつるなり　下元もと子

花さかりひさしくひさに見せむとて
おそくとく咲くにはさくらかな　重松たか子

さくら花さくそのいろはかはらねと
みねにふもとにさきたかへつ　野中あさ子

ふもとにはゆきとちれとも高根には
またしらくもとにほふはなかな　久松せい子

雪とちるはなかさしてやまさくら
さきおくれしもゆかしかりけり　矢野高子

はやくさき遲くちるなるみよしのは
はなのさかりもひさしかりけり　久門利惠子

あたなりとなけかれましと殊さらに
おくれさきたちはなのさくらむ　清水あい子

ひもときそめしおそさくらかな

雨ふりてさかりのはなはちりぬれと
おくるゝつほみはころひにけり
北村孝子

我かやとのさくらはちれとあらし山
はこふあゆみもしけくなりけり
北村貞子

山さくらけふそさかりとなりにける
みやこのはなはさくにちりしを
北村正枝子

ちるもありさかりもあれは未咲かぬ
花もありけりみよしのゝおく
小森きた子

はや咲もおそきもありてさくらはな
みる目もなかきはるのたのしさ
佐々三愛子

ちるを惜みさくをたのしみ見る人も
こゝろふたつのはなのころかな
中村弦子

おそくさく恩ひくにさきいてゝ
はなのさかりそひさしかりける
眞鍋直子

ふもとなる花のさかりにわけいれと
みやまはいまたつほみなりけり
田津木久子

いつくにも花なきさとはなけれとも
みなそれくのさきをまつらん
福島まつ子

みやまにはまたさきそめぬ花あるに
はやまにちりしこすゑみゆけり
山根久子

奧とのみみしはふもとのこすゑにて
おくはまたしきけなさくらかな
武田粲子

ちるを惜しと見る間に後の咲き出ゝ
あくよはあらすやまさくらはな
もろたか千代子

いさゝらはみ山のさくらたつねみん
みやこのはなはかけものこらす
三笠友子

ひとさかりあれはうつらふ花なれは
さきつく木々のたのもしきかな
河野文子

八重かすみ春のひかりやへたつらん
かたねはおそくはなさきにけり
佐々小琴子

初はなとかたやまさとはめつれとも
みやこはちりしあとの葉さくら
德永萬壽子

雲かともみやまのさくら咲きにけり
よし野のうらはあらしふくらむ
淺賀とし子

みよし野のやまへは雲とさきぬらむ
かたやまさとのはなのまたるゝ
淺賀はな子

いつしかとまちしさくらは咲きに鬼
吉のゝみれはあらしとそおもふ
筧きよ子

大かたはさかりをすきぬれとしとて
かこちしはなもまたさきにけり
楠瀨兎女子

名にたかきうへのゝ春はすきつるに
すみたのはなはいまさかりなり
靑木春子

みよしのゝふもとの花はちりぬれと
深やまのおくはいまさかりなり
荻原章子

みわたせは春のやま邊にさくらはな
おくれみはやみ咲きてけるかな
小曾根志う子

春かせのさそふまにくひらさくも
さかぬもましるやまさくらはな
諸井くら子

おくるゝもいそくもありて花のやま
あつまちか子

はるのなかめそひさしかりける

さきさかぬ花にましりて木下かけ
おいもわかきもあそふはるかな
池谷さみ子

里ちかきかたはさけともやまかけは
はるにおくるゝはなもありけり
杉渕いさ子

さかりなるみやこの花を見てのちに
おくるゝやまのさくらかりせん
脇洲ます子

花のやまくもかとはかり見ゐたれと
しつゑはいまたつぼみなりけり
大谷津孚子

八重ひとへとりしくうゑしわか園は
なつまてはなのさかりなりけり
福木治子

あめつちの同しめくみにうるほひて
あささきにほふやまさくらかな
北島功子

同しひのひかりうくれとおそさくら
散りゆくはなにならはすもかな
北島松子

ひと本のこすゑなからもさくはなは
おのかまにまにおくれさきたつ
上條よし子

このゆふへ吹く春かせにこゝろせよ
さかりのはなのみたれもやする
增田すゑ子

山さくらゆきてな見んとおもふまに
今朝のあらしのさそふわひしさ
原いち子

雲と見しうへ野のさくらちりはてて
いまこかれぬそはなさかりなる
松尾こと子

さくらちるみやこ大路ははるくれて
[illegible]
上村たか子

花のちるみやこをいてゝ來て見れは
つほみもかたし木曾やまさくら
勝もゝ代子

きたみなみこすゑをわけて庭さくら
散り初むるありふくめるもあり
佐々木千鶴江子

山さとはまたにほはぬをみやまには
ゆきと見るまてちるさくらかな
荻原しける子

さくら花ねはひとつよりおひなから
いかなるゑたのさきおくるらん
栗田口信子

ちれは又かた枝にほひてひとときに
さかぬそはなのなさけなりける
青羽茂技子

玉くしけふた木のはなを庭にうゑて
おそきはやきをまつこゝろ見ん
星野かつ子

はつ花に世ひとのこゝろうこけとも
のちの花をもまたたまれけり
星野仁子

さくおそく芳ふさくらにあくかれて
なかきはる日もはなにくらしぬ
大海原芳子

ふもとなるさくらはちりて吉野やま
おくなるはなはいまさかりなり
小野田のふ子

春の日のおなしひかりにあひなから
おくるゝはなのなさましるらむ
井上八重子

をちこちにおくれさきたつさくら花
はるなかゝれとにほふなるらむ
林久子

さきかけしはなにつれなきあめ風を
すこしてにほふやまさくらかな
八太光子

四月五日　兼題　小學校を卒業せし人よれくる文

天　千葉縣佐倉　植木　鋼子

うけたまはりぬこたび某小學校の試驗にいよ〳〵全科の卒業なし給ひぬと殊に御成績も校中第一にてもろ人の常にうらやみ望む名譽のあかりしふみをさへ得給ひぬる事誠に日頃より朝夕に他念なくはげみれはせしいさをのあらはれしものにておろかなる宿の子供等にも今より君を鑑とし學へかしなといひさとし侍りぬ御兩親の御よろこびさころと推はかられてなむ猶限りなき學びの道奧深く進み行き給はん事後を期して待ち參らするにころあなかしこ

地　播磨龍野　田津木　久子

年月のうつろひゆくことはげに夢のやうにて小學へ入らせ給ひしは昨日今日の如く思ひ給へらるゝにはや先つ日は其學のわざを卒へさせ給ひてあかしの文をさへ受け給ひしとか御父母の君は申す迄もなく御祖母君のいかはかりよろこびせ給ふらんとれしはかり參らするたにいとも〳〵うれしくてなん猶ます〳〵進みて怠なく文の林に分入らせ給ひて學の道のれくかを極め高きほまれをあげ給へかしとねき奉ることになむあなかしこ

人　山梨縣甲府市山田町　名取正代子

うれしさのあまりに一筆もとる手れろしとはしりかき侍りぬさても君が小學に入りたまひしはいまだ此程とればね待りしに實に月日に關守なくはや七とせの春秋を經たまひてこゝに小學のわさ卒へたまひぬる事いともめでたうよろこび聞ね侍りさても君が御さかのかしこきは今更まをすまでもなく日頃はげみたまひぬるいさをはこたびにあらはれて數多の人の中に一の位をしめたまひ殊に文部省よりも格別の御褒狀得させ給へりしとかまことにうれしともめでたしともいはん方なくてなん妾さへかゝるをまして君が親きみはらからの御よろこびはろもいかむかりぞや推はかられてなんさても學の道はなか〳〵に奧深くしていづこをかぎりと定めなければまづ小學を卒へ給へ、はなほ高等なる女學校もあまた侍れどけふの御心たゆみ給はずます〳〵いそしみたまへやなほまをし聞ねまほしき事澤に侍れとあすはたいめたまはりて委しう御ありさまもうけたまはらましと取敢へすよろこび聞ゆるになん

佐々有鄰子

今日はいかなる吉日の足日かもむらきもの心くだきたまひて雪に螢に

花に月に一日も落ることなく尋常小學校はさらなり　高等小學校にも四年の月日をつもり〳〵て昇降なしたまひし　學力は平日のいかめしき卒業式につらなりいく百千の生徒たちに立まさりて一等の　賞典の榮譽を荷ひたまひてあまたの令娘等の一の　席につきたまひて父母にまみねたまひしとかあなめでたあなゆかし行末ながく祝奉らんとてなも

土肥仙子

すべらきのいともかしこき此大御世に生れ　いづるもの禽獸虫魚にいたるまてみな神佛のふかきめぐみと親のいつくしみと　によりてならざるはなし況んや萬物の靈とよばれたる人において　をやそも〳〵みどりこの時よりたらちねのもとにゐてさま〳〵いたはり　はぐゝまれやう〳〵とし五ツ六ツになりぬればはや幼稚園の草くを　ふみわけさては又小學校にうつり入りては師の君かへりてはちゝはゝの　教をうけてのち世にもしらるゝやうにはなるべきものながらその　教へらるゝをさな子のよろづの事につけて常の心がけのよきとあしきとによりて　いかにもなるべきものなるべしされはこそいかにたらちねの　親々の君又師の君たちのこゝろ盡してよきしつけせんとたほしても心がけ　あしくてそのをしへをまもらざらんにはかならすうるはしき名譽あるなでしことは　ならざるべし　こたび小學校卒業をさせ給ふ人たちあまたある中にいとも優れたるめん狀　うけさせたまひてみづからはさらなりふた親の君のみよろこびいかならんと推ばかりもやられず　誠に御孝行のきはみとぞ申候べきこれみな父上母上はた師の君たちの　をしへの宜しきによるとはいへをしへをうけ給ひし御かたのみこゝろがけと　學の道をいそしみたまふ事のすぐれしいさをのあらはれたるものなり　されば此こと千代も八千代もさゞれいしのいはほとならむ　のちの世までのものがたりにものとかくおもふ什が一だにつくしがたけれど　かゝることよなき　御ほまれをいはひ奉らむと　おもふ心の端をいさゝかかきしるしてまゐらするになむ穴かしこ

なでしこのはけむこゝろのあれはこそ
親のをしへもあらはれにけれ

土井もと子

いつしかと廻る月日のはや立ちてお別申候てより花又咲きて此に　一とせあまりに相成申候そゞろに思ふふるさとの　野邊のわか菜は誰がつみし堅くも結ぶ友垣の今は　如何にと明けくれに鳴くなく歸へる雁金の影を見送り　物思ふ折から使女の入來りて一通の玉章置き去りけるを見れは御身の御手蹟　あななつかし拾ふ手もおそしと封おし切りくりかへしまきかへし拜見申上候處あなたさまには此度の試驗には　無滯御及第被遊加之いとほまれある上位を占められ教師　其他の人々にも賞讃を受け生徒の中にも大に面目をほどこ　され候趣誠に　目出度存なるわらはまでよろこばしく雀をどり申候是れ　天性英敏の御身とは言ひながら又常つねの切磋研勉の功と存ぜられ候更に猶ほ進んで高等の教育を　受けんとし給ふ御心失禮ながら御年いまだ　わかきにもかゝはらず斯く進ませたまふこと實に恐入申候諺にもせんたんは二葉の　内より香ばしと申し候は今御身の上にこそわらはもいと　たのもしく候昔の尊き聖人の言葉にも教訓の道は行く程明けず戻りて見れば暗の夜の　道と申され候へば何卒小成に安んぜずいまひとしほの　御奮勉あらせられあつはれ女子の手本とは成れ度祈上候隨分今後種々の困難あらんも　計りたく候へ共是れ敵の免れ難きことに候學の道は山坂多し　昇りつめてぞ花は咲くなるとかされば左樣御覺悟の上折れず撓けず　立てそめし志を全うせらてし

げみ居り候まゝ御心やすく願上候末筆ながら[illegible]候 いさゝにせられ御身の上大切に御保養專一に御座候先づは 御卒業の御よろこび申上度あらしくかしく

西尾直子

さみだれにうたれて開くゆりのはな さうべなるかな凡そ事のなるなる日になるにあらずして必やもとづくところ あるべきなりうけたまはるにおもとには めでたく小學を卒業遊ばされことに成績も立ちまさらせられしとこそこれまたく つれ〴〵はけみたまひししるしのあらはれゆりにもいやまさる花な開かせ給ひしにてこよ なうられしくよごさまなし上げまゐらするになむなごかましきことながら古きよりの 誡めにも小成に安ずるなかれとこそ いひはべれかつは學びの道のいやとほりくかれこれとなさめたどるも なほあまりありとはかせすらいひたまへりされぱなほも修業あらせられて いみしきみなむすばせたまへかしとほこりがにもまなしすゝめまゐらするになむ

牧野貞子

そが學びやに入り給ひてより同じ窓の中にも御年いと若う おはしつるが上に御さがゝしこくさま〴〵の 學課より品行に至るまで萬人々に優れさせ玉ひ 常に首席をしめ玉ぶよしはかれ〴〵承りつるに月日のいつしか めぐりていよ〳〵昨日は卒業の式にあたられ年月御いそしみのなみならぬは そが折に目出度證書をはじめ校中一二のいとも貴き賞品をさへ得させ玉ひし由 ましてやんごとなき方々參列の前にて總代の御答辭をば讀みあげ玉ひしとか いとめでたしとも目出度に御身の榮は更なりかりにも 友垣とちぎりつる妾が嬉しさたとふべくもなくなむいかに父母の君の御喜びもさこそとおしはかりまつりつ 皆これ日頃の德のきたす所と今更に感じ入り侍りぬ なほ承りぬ此後とも高き學ひやに入り玉ひてはいみ玉ふべし [illegible] め玉はむも いさゝみの御事とゆかしう又うらやましう[illegible] さぶらひ 御祝詞等きこえ上べきな朝のほどより物事しげく侍れば取りあへずかくなむかしこ

御代忠子

そよふく風も寒からず花も咲きそむるころとなり侍るな いかに過こさせ給ふらん いつ頃はみ心にかけさせられ御細々の御たまつき給はりたれど御かへりは更にきこえさせ侍らずさぞ御はら立たせ給はん がさる方にゆるし給へ うけたまはりぬればさいつ頃首尾よう小學の道を卒へ給ひし由まことに御目出度き事になん これも日頃御まへの君の内にありては父君母君の御敎を守らせられ 外にては師の君の御さとしを受け學びの道にはげみ給ひし しるしとこそ覺え侍れ猶ほ此後とてもゆめ怠り給はで學びの道に志し給はば妾にとりてもこよなき事に侍りこん 夏の休みには御地に參るべければ 萬は其なりさぶらひてなんあなかしこ

北村孝子

學ひの窓につかせ給ひてよりは もとより御うまれのか志こくませはよろつ御さとりよく 早々とすゝませ給ひて御出精のかひありて八年の學ひも光まさ卒業ましまし てきのふは證書を受け給ひ況いて一等賞をねなほおほくの中より擢はれて 祝文をよませ給ひその文の天晴なることゝ女學校の生徒には希なるものなりきと きゝ侍りぬ是と申すも日ころ御いうみの功こゝにあらはれ給ひて 年ころのおん學問の世人に知らるゝ始にて おん自身のほまれのみにあらすちゝはゝさまの御名をもあらはし給ふことになん 則ち君のほまれのうれしさにかくなん

眞鍋直子

昨日は小學校の學のわさを卒へさせられて ゆるしの文をうけたまひし

さへある にまして日頃の御はけみの程 あらはれ侍りて數多き中にも殊にすくれて高きほまれを得給ひしと承るなん いと〻御うれしき御自らは 申すへくもなくかそいろはの君の御よろこひいかはかりとおしはかりまゐらするになん 猶この上ますく〱いそしみはけみてつとめ玉ひなは月の桂を手打らせ給ふもやかての事と いとも〱たのもしく思玉へられ侍りよろすはさふらひて ごあらく〱御ことほきまでかくなん

楠瀬兎女子

この頃は四方のけしきの何となう春めきて 打吹く風もゆるやかに靑柳のいとのどかになりゆくに添ひて君の御わたり彌々勇ましく入らせられ候御事と御祝申上參らせ候 偖此程の御しけんには首尾よろしく御卒業遊されかひしよし承り嬉しさ限りなう存じ參ゐらせ候 年頃君が螢雪の御いさをしもしろく 此御ほまれを得給ひしは誠にふりつむ雪をしのぎて今を春べと 咲出てし梅の花の薫りいと深きに比ひて御行末賴もしう御祖父母君を始め父母君の御悅いか斗にかと 推し上げまゐらせ候

咲きし時此實をむすふ梅の花

とは千代女かいひしとか けにこの如く御床しさに先は拙き言葉もてこの程の御悅申上參らせ候かしこ

太田さだ子

螢雪を集め給ひし日頃の御はけみ けふこそあらはれ給ひていぬる二十八日の御式には 一の御席をもてゆるしのふみ賜かれしのみか數々の御物をさへ授けられたまひしなさなんいとも〱はれなる御事にこそ數ならぬよそ目にだに かくうれしう侍るをまして御ちゝはゝを初め御はらからの御喜びや いかゞならんと察し侍り定めて學びの庭の御賞にもまして くさ〲のふみなどや得させ給ふらんとうらやましうなん倚けたまひて又來む春の御よろこびを 聞かせたまへかへす〲も契りおき侍るになんあなかしこ

北島功子

峰の白雪名殘なくきゑて木々の梢もめぐみそめ いさうらゝかなる八千代の春とは相成候處 皆々樣にはますく〱御さはく〱しく渡らせられ候よし御目出度 御よろこび申上まゐらせ候したがひて手前方にてもまつく〱さゞこほりなく日々相おくり申居り候まゝ 御心安う御思召下され度願上まゐらせ候さて御許樣には今年 やよひのはじめつかたに小學全科御卒業遊ばされ候よし 風の便りに承りうれしう思ひ居たる折柄御細々なる御玉章給はりとるものもとりあへず 拜見いたしまゐらせ候 御許樣には御成蹟も いと御美事にくさ〲の御賞與かず〱の御ほめ言葉をもうけさせられ校を出てられ候との御事 幾萬年の末かけて御目出度御祝申上まゐらせ候 御許樣の御名譽は申も更なり御兩親樣にも御一門の皆々樣にも嘸かし 御よろこびのほどおしはかられて此上なう御うれしく 數ならぬ己が身までのほまれと存んしまゐらせ候これも一偏に御許樣の勉勵數年唯一日の如く 家にまします時は御兩親の君のあつき御さとしの程を專一に守らせられ校に登らせ給ひてよりは 賢師の君の深き御敎訓に一事一物 おこたらせ給ふ事なくよく御心を入れ給ひ善良なる御性行は誠にうるはしき 花立ばなのかをり床しき今日にあらはれ給ひし事にて御坐候 さやうに候へは尙々此上とも進みていや高き敎をうけさせられ候はん事は 申すに及ばすをこがましき己が口にて申上候はかへす〲も おもふせなから此身の事を思ふにつけ唯一言申上度候天つうらてる日の下に人と生れきて何一つなしおほせし事もなくたふとき月日をいたづらに 送り行くは神の御とがめのほどもそらおそろ

それゆゑ御許様には此身を御身のいましめ草とも御思召下され給ひて十分なる御教諭うけさせられ やがては人の母となり愛兒の教育家政の事などには御心を用ゐられくれ〴〵も御忍耐遊ばされ あつぱれ世俗に貞女賢母といひはやされ候はば 御許様の御芳名は申すも更なり當校の御名譽御親戚様方の御名譽また 友どちの數ならぬ私迄のほまれとも相成まゐらせ候何卒一日も早く良教師打そろひて 評判宜しき校をねらみ給ひて 御入學遊ばされ候やう一偏に願上まゐらせ候先はとりあへず御よろこびかた〴〵いさゝか己が思ふふしをものべ親しき 君の御笑草にまで申上候まだ申上たき事濱の眞砂のかず知れず候へ 共つたなき筆にてのべあへずなしき節とめまゐらせ候かしこ

北島松子

拙き筆をもかへりみず 御祝義申上度まゝ一筆染しまゐらせ候此度御許様には 小學全科の業を卒へ給ひすぎつるうづきのはじめつかた卒業證書ならびにくさ〴〵の賞を得させたまひ 御品行も麗はしう成蹟も優に君が代の八千代と共にいとも榮ある首席を占られ芳しき 名を世に殘され校を出てられ候御事いとしき君の御よろこびは申に不及 御兩親のきみの御面目さこそと 存しあけかずならぬ此身も此上なう御うれしう玉椿の八千代までも 御祝申上まゐらせ候かゝるも常日頃家にありては父母の君の庭の教をたれたまひ 出ては良師のねんごろなる導に依るとは申せ御前様も能く其 教にしたがひ雨に風に苦學し給ひし効あらはれこたびの名譽をも得たまひしなりなほも進みて 高尚なる學の門に入りたまふとかやいざさらば これよりは學びの道もいや高く修むへき科目もなにはのあしのいやしげき中にも倫理家政裁縫など よく〳〵心止めたまひさては 脊兒の一課は一入心を入れたまへかし昔より智者の子にたま〳〵おろかなる人いできしためしありさるに 賢母の子には國家有益なる事なし 後世に名を顯げし者まゝありとか聞き及び候まだいはば時々忘らずほたるに雪にいそしみたまひ 幾春秋をつとめ來て二度の學びのわざをへ やがて他の家に嫁き給ひ天晴賢母良妻となり出てられ明治の御代のかゞみとこそ 後の世までも唱はれたまはむことこそわらはの願ひに御座候去りながら 學の道も度に過ぎ病など出來るやうの事ありては却りて 其身の仇となる者にしあれば身体はやまひにをかされぬやうつれ〴〵の心懸こそかんやうとぞんじ候其身よわければ 生れ出しいとしき子も弱しとかや 身體の弱きは親々うきふししげき事とかや申侍り妾の父またよき母の日頃教へ示され候事の 折にふれ思ひ當るふしも多く疾まゝなめすのわざこそまれども 後々のお心添にもなりなんかとあたら御目を煩しまゐらせ候かく申すも 年頃日ごろ心へだてぬ友垣の心づくしのはしぞとも思召し給はらば御嬉しう そんじ上まゐらせ候あなかしこ

陣田槙子

昨日御父君様より 承ればこたび君には小學の業を卒へ給ひて校長の君よりあつかしぶみをうけ給ひきと誠に目出度よろこばしき事に候ことに其成蹟あだし人に立ちまさりて おはしゝとよ母上様の御よろこびもさこそと推しはかり候とても これより後はなほ進みたる學校に入り給ふかたゞしは御兩親の御膝もとにて 家のまかなひ事習ひ給ひつゝ裁縫のわざにいそしみ給ふか そは知るよしもなけれどとまれこれまではたゞ日々學校に通ひ給ふが御つとめにて たとへば花の蕾とは申すべかりしも今よりは美はしき花を開き給ふ御身何事も 母君の御教のまに〳〵女のつとめ萬のわざを習ひ給ひてあつぱれ 世にすぐれたる女となり給ひ人もうらやむうつくしき花を 開きめでたき實を結び給へかしと老のくり事くりかへし 申上ぐる心のほどをくみ給ひなばいとうれしき限り

に候あなかしこや

八太光子

久しう音つれまゐらせさりしかいかゝおはしますらむとのみ思たまへわたりしをきのふ姉君とはせ給ひくさ〳〵の御物語に おほつかなさもはるけはへりぬさてもこのほとは あまたとせの御つとめむなしからていとおろかに小學のわさををへ給ひしと うけたまはるなむいとも〳〵めてたき御事に侍るつれもひとに すくれ給へりしなからことたひはことにあまたの中にて一のくらゐをしめ給ひしと きゝ侍るは御身のさゐはさるものにてまたく日頃の御はけみ のしるしとこそ思ひやりはへれかく二葉のうちより匂ひことにましませは やかて高等のまなひやに入り給はむ後も御はけみ一つにて かくはしき花をもさかせうるはしき實をもむすはせ給ふらむ とゆくすゑたのもしきこゝちそし侍る半紙五束かつをふし一箱御ことほきのしるしまてに まゐらすとみにもまゐて御よろこひきこゆへきを例のことしけき 身とゆるさせ給へやあなかしこ

わらひ

初わらひもえいてしよりはるの野は
かすみのけふりたちまさりつゝ　牧野貞子

餘寒

さけはてし池のこほりをけさはまた
むすひかへしてさゆるそらかな　仝

鶯

はるたちてまた日も淺きかすか野の
くさのはつかにうくひすのなく　靜間みつ子

うくひすのたにのといてゝなく聲に
ゆきかふひともたちとまりつゝ　島津俱子

松間花

常盤なるまつの木の間にほの〳〵と
あらはれそめしやまさくらかな　住山幾子

行路花

車おりてかちあゆみする嬉しさは
はなさくはるのやま路なりけり　前澤幸子

庭落花

わかにはの花ちりにけりおほかたの
はるもいまはとつけていぬめり　河野文子

荒屋燕

あれはてゝたのむかけなき軒端にも
むかしわすれすとふつはめかな　仝

孤島松

浪路行くしをりなるらんいつの海の
ひとなきしまにたてるおいまつ　小町谷里江子

紫式部

かきわけし言葉のはなにむらさきの
ふかきいろ香の見えにけるかな　堀川松枝子

をし鳥

むつましきをしのつかひを世の中の
なみかせたつるひとに見せはや

西村茂樹翁序　三輪田眞佐子著

女子處世論　全

●定價　金貳拾錢
●郵稅　金四錢
●郵劵代用一割增
但一錢切手に限る

三輪田女史の婦人教育に於ける其の薫陶化導の良績夙に女子教育社會に推重敬服せらるゝは敢て贅言を要せざるなり先に女史我が國婦女子に本分の在る所を示さんとして女子之本分の著ある本社之を世に公にするや再版三版忽ちに賣盡し四版の成るを告げたり世間高評の重き知るべきなり女史今又本書を著述し女子處世の心得を説く溫厚着實を旨とし其の理義を丁寧反覆す世の婦女子たる者坐右一日も缺くべからざるの良書たり請ふ續々御注文あらんことを今左に其の目次を掲げぬ其の詳細は本書に就きて見られよ

目次

第一章　緒言
第二章　自然のまゝ
第三章　德の光
第四章　智の値
第五章　立志の基
第六章　健康
第七章　容態と擧止と
第八章　世のすがた
第九章　婚姻及婚姻の後
第十章　行爲の標準
第十一章　身のもとめ
第十二章　忍耐
第十三章　精神の修養
第十四章　文弱の弊害
第十五章　節儉と勤勉と
第十六章　迷の心
第十七章　安心の道
第十八章　長所の養成
第十九章　樂しき家風
第二十章　人の心服
第二十一章　禍福のわかれ路
第二十二章　われらはいづこの女子
第二十三章　結論

東京市京橋區築地二丁目廿一番地
發行所　國光社
（電話番號一九四六）

女鑑第百六號目録

女鑑
風俗の改善……
論說
女子と學藝(序論)……雨後翠江
女子教育一班(十五)……三輪田眞佐子
幼稚園普及の一方法……多田房之輔
史談
奈良義成の妹……鹽井ふく子
八重菊、八重牡丹……佐山茂子
家政
たちぬひ……西山たい子
たいどころ
このにろ……鋤柄義子
學園
日本文典(七)……鹽井正男
磐といふ字につきて……永石德文
漫錄
なみたくさ(承前) 京極忠高女●あさせのしろべ(續き)故人藤井高尙●おきの玉藻(八) 永石德文●弟橘媛の淸節 金子薰園●和泉式部と小式部の内侍の墓 松廼舍主人●つみ草 草のや主人●わらびはなし 薰風仙史●野寺の蟲(つゝき) 石樽靑苔●落花(三) 柴田千稻●時雨(その六) 白魚女史
文林
歌數百首 文數十章
雜報
聖德無彊●兩陛下和歌を好ませ玉ふ●沼津御滯在の東宮殿下●皇太后陛下還御●御題●教員檢定試驗の志願●高等女學校設置●女子三年生悉及第す●中京女學校●出產減少して人口增殖す●飮酒家と禁酒家の命數●才島の蒙古塚●赤き心●なつかしき文●河内の孝子●東京府下第一の高齡者●日本の豆腐●電氣學上の發明●結婚蕃女●丁汝昌の未亡人●あやしきこと●不敬奴●ニウメキシコノ催眠草
敎の庭
兼題 歌數百首 文數十章ほかくさく
附錄
十六夜日記講義(つゞき)……月池閑人

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京銀座郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若強ひて領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

毎月五日廿日發行

定價		廣告料
一冊	十錢	五號活字廿三字詰一行金二十錢
六冊(三ヶ月分)	五十五錢	
十二冊(半年分)	壹圓	
全國無遞送料		

明治二十九年四月十九日印刷
同　年四月二十日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行兼印刷人　川崎直衛
同　編輯人　山根勇藏
同　發行所(電話番號一九四六)　國光社

(印刷所　東京國光社印刷部)

(明治二十四年八月八日内務省許可)
(明治廿五年三月十二日遞信省認可)